

王陵の地域史研究

～飛鳥地域の終末期古墳測量調査報告Ⅱ～

2007

例 言

- 1、この調査は「飛鳥地域の地域史研究」の一環として行った測量調査である。調査地は以下の通りである。
 - ・ 石舞台古墳 奈良県高市郡明日香村大字島庄小字塚脇135番地他
 - ・ 打上古墳 奈良県高市郡明日香村大字細川小字打アゲ724番地
 - ・ ムネサカ1号墳 奈良県桜井市粟原小字峯坂417番地
 - ・ エンドウ山1号墳 奈良県桜井市倉橋小字吉ヶ谷790番地
- 2、測量調査に際しては、古墳の土地所有者の各位にご理解あるご協力をいただき、順調に進行、完了したことに深謝の意を表したい。また調査に際してご尽力を賜った関係各位に感謝の意を表します。
相原嘉之、網干善教、猪熊兼勝、上田俊和、奥田 尚、佐藤右文、清水真一、伊達宗泰、中岡保之、納谷守幸、西川貴三子、西田 博、萩原儀征、橋本輝彦、前坂尚志
- 3、遺跡分布図は、帝國陸地測量部「桜井」(1:25000)、国土地理院発行の「畝傍山」(1:25000)、桜井市都市計画図(1:10000)、明日香村都市計画図(1:2500)を使用した。
- 4、石材鑑定には奥田 尚氏(橿原考古学研究所共同研究員)に玉稿を賜った。
- 5、本書の執筆は西光慎治、山本謙悟、奥田 尚があたり、文責は目次に示した。
- 6、関係書類・図面等は西光慎治が保管している。
- 7、本書の編集は西光慎治が担当した。

目 次

例 言	52
目 次	52
第1章 調査に至る経緯と目的	西光慎治 54
第2章 飛鳥地域の測量調査	54
第1節 地理的・歴史的環境	西光慎治 54
第2節 石舞台古墳測量調査報告	西光慎治 58
1、はじめに	58
2、測量調査報告	63
第3節 打上古墳測量調査報告	西光慎治 64
1、はじめに	64
2、測量調査報告	69
3、細川墓ノ下古墳測量調査報告	69
第3章 飛鳥周辺の測量調査	70
第1節 地理的・歴史的環境	山本謙悟 70
第2節 ムネサカ1号墳測量調査報告	西光慎治 72
1、はじめに	72
2、測量調査報告	72
3、表採遺物	72
4、石材分析	奥田 尚 74
第3節 エンドウ山1号墳測量調査報告	西光慎治 74
1、はじめに	74

2、測量調査報告	(77)
第4章 総括	西光慎治 (77)

挿図目次

第1図：飛鳥地域周辺遺跡分布図 (1：25000)
第2図：石舞台古墳位置図
第3図：石舞台古墳周辺地籍図
第4図：西國三十三所名所圖會
第5図：大和國古墳墓取調書
第6図：島莊石舞臺圖・島莊石舞臺内部圖 (『大和志料』)
第7図：石舞台古墳石室実測図 (1：70)
第8図：大和國古墳墓取調書
第9図：打上古墳位置図 (1：5000)
第10図：打上古墳周辺地籍図
第11図：打上古墳石室図 (『高市郡古墳誌』)
第12図：細川墓ノ下古墳石室略測図
第13図：打上古墳石室実測図 (1：50)
第14図：鳥見山周辺遺跡分布図 (1：20000)
第15図：ムネサカ1号墳位置図 (1：10000)
第16図：ムネサカ1号墳周辺地籍図
第17図：ムネサカ1号墳出土凝灰岩 (1：4)
第18図：ムネサカ1号墳石室実測図 (1：50)
第19図：大和國古墳墓取調書
第20図：エンドウ山1号墳位置図 (1：10000)
第21図：エンドウ山1号墳周辺地籍図
第22図：エンドウ山1号墳石室実測図 (1：40)

写真図版

図版一 上：石舞台古墳・奥壁	図版五 上：ムネサカ1号墳・奥壁
図版一 下：石舞台古墳・玄門	図版五 下：ムネサカ1号墳・玄門
図版二左上：石舞台古墳・玄室北西隅	図版六左上：ムネサカ1号墳・玄室北西隅
図版二右上：石舞台古墳・玄室北東隅	図版六右上：ムネサカ1号墳・玄室北東隅
図版二左下：石舞台古墳・玄室左袖	図版六左下：ムネサカ1号墳・玄室左袖
図版二右下：石舞台古墳・玄室右袖	図版六右下：ムネサカ1号墳・玄室右袖
図版三 上：打上古墳・奥壁	図版七 上：エンドウ山1号墳・奥壁
図版三 下：打上古墳・玄門	図版七 下：エンドウ山1号墳・玄門
図版四左上：打上古墳・玄室北西隅	図版八左上：エンドウ山1号墳・玄室北西隅
図版四右上：打上古墳・玄室北東隅	図版八右上：エンドウ山1号墳・玄室北東隅
図版四左下：打上古墳・玄室左袖	図版八左下：エンドウ山1号墳・玄室左袖
図版四右下：打上古墳・玄室右袖	図版八右下：エンドウ山1号墳・玄室右袖

第1章 調査に至る経緯と目的

飛鳥地域には多くの後・終末期古墳が分布していることは周知のことである。しかし未だ資料化されていないものも少なくない。こういった中、1982（昭和57）年以降、奈良県橿原考古学研究所や関西大学考古学研究室等によってキトラ古墳をはじめ牽牛子塚古墳や岩屋山古墳、塚本古墳古墳などの測量調査が実施されている。こういった測量調査は基礎資料の資料化として地域史研究にとって重要な役割を担っていることはいうまでもない。

今回の調査は筆者が飛鳥と周辺地域の地域史像の解明に向けて取り組んでいる「飛鳥地域の地域史研究」の一環として企画し、土地所有者のご厚意を得るとともに花園大学考古学研究室の有志の協力のもと測量調査を実施したものである。

調査は通常勤務に支障のないことを期したため、休日や年末・年始を利用した断続的な調査となった。調査期間は平成14～18年にかけて約4年間、のべ45日間行った。

【調査体制】

測量調査は総括、副総括が中心となって実施した。調査体制は以下の通りである。

	石舞台古墳	打上古墳	ムネサカ1号墳	エンドウ山1号墳
担当者	西光慎治	西光慎治	西光慎治	西光慎治
総括	—	—	松谷久史	—
副総括	—	—	北村勇人	—
調査員	安永周平、福井順子、山本謙悟			

【見学会の開催】

参加者が中心に測量調査の深化と比較検討を行うため、見学会を実施した。見学した古墳は以下の通りである。

赤坂天王山古墳、秋殿古墳、岩屋山古墳、カヅマヤマ古墳、乾城古墳、艸墓古墳、牽牛子塚古墳、庚申塚古墳、マルコ山古墳、小谷古墳、菖蒲池古墳、嶽山古墳、谷首古墳、東明神古墳、塚本古墳、花山西塚古墳、花山東塚古墳、舞谷2号墳、真弓鐘子塚古墳、文殊院西古墳、文殊院東古墳

【勉強会の開催】

参加者を中心に各自のテーマについて発表を行い、深化に努めた。

第2章 飛鳥地域の測量調査

第1節 地理的・歴史的環境

【地理的環境】

明日香村は奈良盆地の南端に位置しており、背後には龍門山地が連なっている。龍門山地は奈良盆地と吉野山地を二分する位置にあり、中央構造線にそって吉野川が西流している。吉野川は下流域の和歌山県に入ると紀ノ川と称されている。龍門山地は奈良県のほぼ中央を東西に伸びており、奈良盆地と吉野山地とを繋ぐ幹線道は現在では芦原峠（芦原トンネル）となっているが古代では下ツ道から続く、巨勢路（紀路）や宮滝へと続く芋ヶ峠がありこれらの幹線道

は村内を貫いており交通の要衝であったことが窺える。龍門山地は龍門岳（904m）を主峰にして、北に熊ヶ岳（904m）、経ヶ塚山（889m）、音羽山（801m）が連なり、東には多武峰の御破裂山（619m）を、西に高取山（583m）を配している。明日香村は御破裂山、高取山から派生した樹枝状に伸びた低位丘陵に抱かれた地域に位置している。

明日香村内の主要河川は南東から村内を縦断するように一級河川の飛鳥川が、西には高取川があり、それぞれ北流している。飛鳥川は多武峰と高取山から連なる芋ヶ峠、竜在峠付近に源を発している。途中、冬野川や唯称寺川と合流し、甘樫丘の東方で流れを北西に屈曲させ北流を続けていく。一方、高取川には桧前盆地を流れる桧前川が注ぎ込んでいる。

桧前盆地は標高100mの等高線に囲まれた1km四方の小氾濫原の支谷に形成されており、西側には幹線道の下ツ道が接している。高取川の西方にある貝吹山から伸びる尾根筋の裾部には高市郡と葛城郡との郡界となる曾我川が北流しており、大字寺崎付近で越峠付近から伸びる前川が曾我川に流れ込んでいる。

【歴史的環境】

〈縄文時代〉

明日香村では飛鳥川や高取川流域を中心として縄文時代から人類の生活の営みを知ることができる。高取川流域では縄文時代草創期の有舌尖頭器が出土した桧前脇田遺跡を始めとして、飛鳥川流域では中期～晩期にかけての稲淵ムガンダ遺跡・島庄遺跡・飛鳥京下層遺跡・大官大寺下層遺跡が存在し、集石遺構や竪穴式住居などが検出されている。また高取川流域では縄文時代草創期の有舌尖頭器が出土した桧前脇田遺跡などがある。

〈弥生時代〉

弥生時代になると飛鳥京跡（岡遺跡）（前期～後期）・山田道遺跡（中期）があり、島庄遺跡では中期の多角形プランを有した竪穴住居が検出されており、高取川流域では御園アリエ遺跡（中期）がある。

〈古墳時代〉

古墳時代ではまとまった遺跡は確認されていないが飛鳥寺下層遺跡や飛鳥京下層遺跡等で6世紀前半～後半にかけての竪穴住居等が数基検出されている。飛鳥地域、特に飛鳥川流域では右岸の段丘上を中心に縄文時代から人々が生活を営んできたが、6世紀末に飛鳥真神原に飛鳥寺が建立されて以降、寺院や宮殿が立ち並ぶようになる。古墳については飛鳥川の支流、冬野川流域には横穴式石室を主体とした約200基を超える細川谷古墳群が展開している。群内には緑泥石片岩の箱式石棺を内蔵した堂ノ前塚古墳や穹窿式石室を有し、ミニチュア炊飯具等が出土した上5号墳、石材の一部に切石を用いた打上古墳など特徴のある古墳が多く分布している。また冬野川下流域には一辺約60mの方墳の石舞台古墳が存在し、対岸には都塚古墳や塚本古墳など家形石棺を有した6世紀後半から7世紀初頭にかけての古墳が築かれている。その他、寺川の支流、中の川の上流部には八釣・東山古墳群が展開しており多くの馬具やガラス玉等が出土している。また曾我川の支流、前川の上流部ではミニチュア炊飯具等が出土した与楽古墳群や石室の両側に開口部を有した真弓鎌子塚古墳など貝吹山（標高210m）の南側斜面には数百基の古墳が展開しており、東漢氏の奥津城と考えられている。また高取川流域では方格規矩鏡や四獣形鏡等が出土した向山1号墳やミニチュア炊飯具や釵子が出土した坂ノ山古墳群などが点在している。また隣接してある観音寺遺跡や清水谷遺跡からは大壁住居やオンドル遺構、方



- 1、石舞台古墳 2、打上古墳 3、貝成組田古墳 4、都塚古墳 5、坂田寺跡 6、稲淵宮殿跡 7、塚本古墳 8、島庄遺跡 9、東橋遺跡
- 10、桶寺跡 11、川原寺跡 12、川原寺裏山遺跡 13、飛鳥京跡 14、飛鳥京跡苑池遺構 15、酒船石遺跡 16、飛鳥池遺跡 17、八釣・東山古墳群
- 18、竹田遺跡 19、山田寺跡 20、庚申塚古墳 21、奥山久米寺跡 22、大官大寺跡 23、雷丘北方遺跡 24、雷丘東方遺跡 25、石神遺跡
- 26、飛鳥水落遺跡 27、豊浦寺跡 28、飛鳥寺跡 29、飛鳥東垣内遺跡 30、甘樫丘東麓遺跡 31、鷺浦池古墳 32、五条野宮ヶ原1・2号墳
- 33、五条野向イ遺跡 34、五条野城脇古墳 35、五条野内垣内古墳 36、植山古墳 37、五条野丸山古墳 38、梅山古墳 39、カナヅカ古墳
- 40、鬼ノ畑・雪隠古墳 41、野口王墓 42、西橋遺跡 43、定林寺跡 44、中尾山古墳 45、高松塚古墳 46、塚穴古墳 47、御園遺跡群 48、檜隈寺跡
- 49、檜隈門田遺跡 50、呉原寺跡 51、キトラ古墳 52、観音寺遺跡 53、稲村山古墳 54、ホラント遺跡 55、清水谷遺跡 56、松山古墳 57、向山1号墳
- 58、森カシタニ塚古墳 59、森カシタニ遺跡 60、出口山古墳 61、坂ノ山古墳群 62、檜前上山遺跡 63、佐田遺跡群 64、マルコ山古墳
- 65、カゾマヤマ古墳 66、真弓籬子塚古墳 67、牽牛子塚古墳 68、岩屋山古墳 69、沼山古墳 70、益田岩船

第1図 飛鳥地域周辺遺跡分布図 (1:25000)

形池などが検出されるなど檜隈地域周辺には多くの渡来系氏族が蕃居していたことが窺える。

〈飛鳥時代〉

7世紀に入ると高取川左岸（真弓丘陵）から右岸（桧前盆地）にかけて多くの終末期古墳が築かれるようになる。真弓丘陵では精美な横穴式石室を有した岩屋山古墳や凝灰岩の巨石を刳り貫いた牽牛子塚古墳があり、石室内からは大量の夾紵棺片とともに七宝亀甲形座金具や玉類が出土している。更に南方には六角形を呈したマルコ山古墳や凝灰岩の切石を積み上げた東明神古墳、骨蔵器を内蔵したとされる出口山古墳などが点在している。また結晶片岩の磚積石室で棺台を有したカヅマヤマ古墳などが点在している。桧前盆地になると梅山古墳からカナヅカ古墳、鬼の俎・雪隠古墳、野口王墓が東西に並んで築かれており、南方には八角形墳で火葬墓の中尾山古墳や極彩色の壁画で有名な高松塚古墳が存在している。更に高松塚古墳から1.5km南には四神図や天文図、十二支像が確認されたキトラ古墳がある。飛鳥盆地では蘇我氏の氏寺の飛鳥寺をはじめ、豊浦寺や山田寺、奥山久米寺、坂田寺、定林寺などの多くの古代寺院が築かれる。天武朝には大官大寺などの官寺が造営され、飛鳥寺や川原寺も当時、隆盛を極めた。また宮殿も大化改新のクーデターの舞台となった飛鳥板蓋宮や斉明天皇の後飛鳥岡本宮、天武天皇の飛鳥浄御原宮や苑池などが造営される。これらの宮殿に近接して酒船石遺跡や飛鳥池遺跡がある。酒船石遺跡では酒船石を中心に丘陵を藤原層群豊田累層の凝灰岩質細粒砂岩を使用した石垣が約700mにわたって巡っており、また丘陵の北側裾部からは亀形石造物を中心とした導水施設や石敷き広場が検出されるなど二槻宮との関連が注目されている。また石上山石を運んだ狂心渠と考えられる幅約10mの運河跡が飛鳥東垣内遺跡で検出されている。この運河は約1kmにわたって続いており、上流部には飛鳥池遺跡が存在する。飛鳥池遺跡は7～8世紀にかけての官営工房で炉跡や石組み溝、掘立柱建物の遺構の他、金属・ガラス玉・鋳型・大量の木簡、また鋳造貨幣では和同開珎より遡るとされる「富本銭」が出土している。この他、飛鳥東方の丘陵地には小原シウロ遺跡や東山マキド遺跡、竹田遺跡があり、7世紀代の掘立柱建物群が検出されている。また橘寺西方にある西橘遺跡では7世紀後半～末にかけての庇付掘立柱建物や大量の木簡が出土している。宮殿域の中心部から離れた桧前盆地では東漢氏の氏寺とされる檜隈寺や呉原寺等の寺院が建立されるようになる

〈奈良時代以降〉

西暦694年、政治の舞台は飛鳥京から藤原京へ、更に藤原京から平城京に移るようになると飛鳥地域では顕著な遺構はあまり認められなくなる。一方、雷丘東方遺跡では井戸枠の年輪年代から淳仁朝の「小治田宮」が奈良から平安時代にかけて存続していたことも明らかとなっている。中世以降になると橘寺や川原寺、飛鳥寺など飛鳥の景観を形成していた堂塔伽藍が落雷等により相次いで焼失し、飛鳥の風景が大きく変貌していく。南北朝期に越智氏が越智城を構え、飛鳥周辺にも貝吹山城や佐田城が築かれるようになる。また越智氏は高取山に逃げ城的な存在の高取城を築き、その後本多氏、植村氏によって改修を重ねながら高取藩の居城として幕末まで存続していく。高取城の石垣の一部には古墳の石材を転用しておりこの時期飛鳥地域の後・終末期古墳が破壊されていたことが推測できる。飛鳥盆地には砦的性格をもつ奥山城や飛鳥城、雷城や岡城、そして野口城や貝吹城、観覚寺城が築かれるようになる。近世になると西国七番札所である岡寺（龍蓋寺）の門前町が賑わいをみせ本居宣長も岡の葉屋で一夜を過ごし、今日もなお古い町並みは往時を偲ばせてくれる。

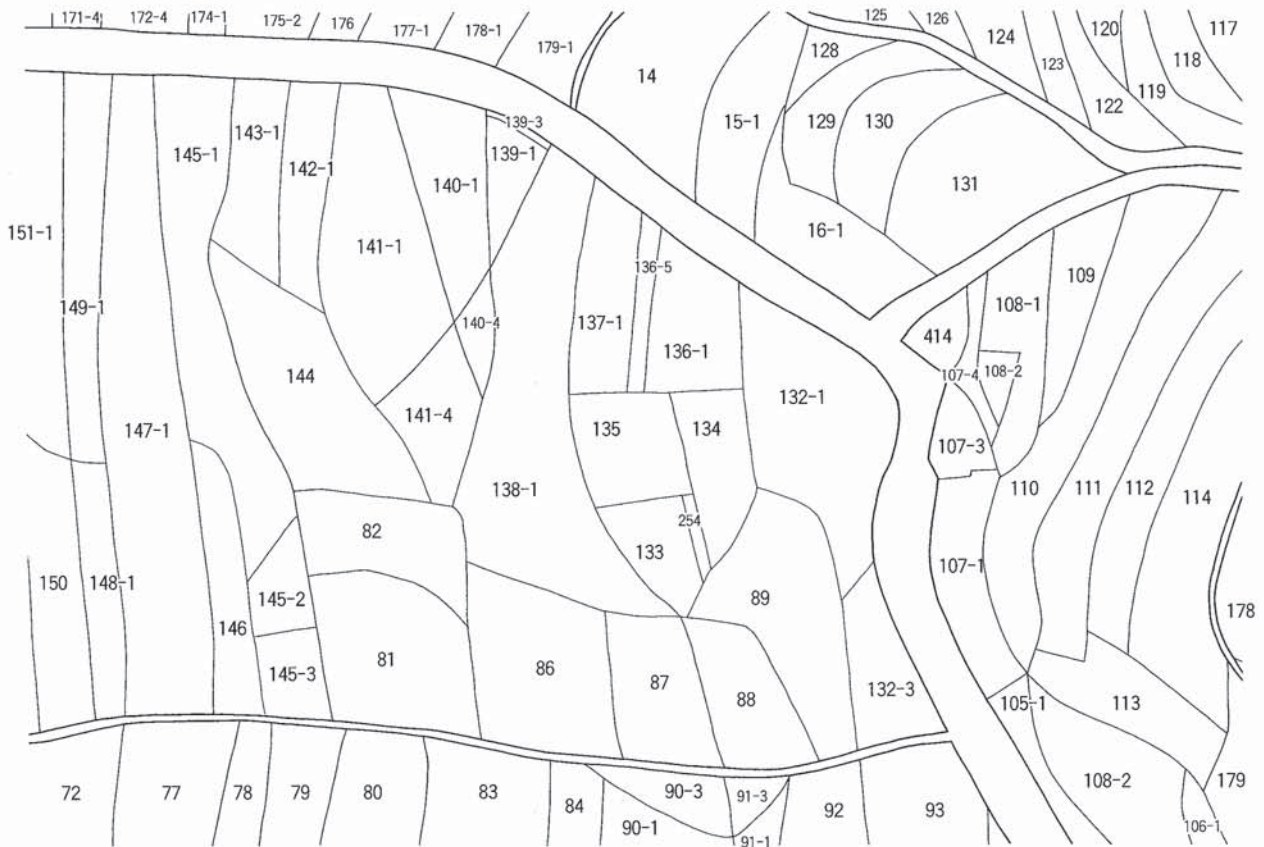
第2節 石舞台古墳測量調査報告

1、はじめに

石舞台古墳は奈良県高市郡明日香村大字島庄小字塚脇135番地他に所在する終末期古墳である。石舞台古墳は飛鳥を代表する古墳の一つで年間を通して多くの観光客が訪れる一大観光地となっている。この石舞台古墳については早くから巨大な天井石が田圃の中から露出しており、人々の注目を集めていたことが残された紀行文等からも窺い知ることができる。1673～81（延寶年間）に著された『和州舊跡考』には「細川村より四五町西なり。その近き所に石太屋とて陵あり」と記されている。1751（宝暦元）年には『古跡略考』の中で「嶋庄村 石塚 内方二間外東西四間余南北六間余 石太屋といふ陵にや。」とあり当時、石舞台古墳が石太屋（いしぶとや）と呼ばれていたことがわかる。1762（宝暦12）年には土谷川清によって『書紀通證』が著され「島の莊村に荒墳あり、疑らくは是れ桃原墓」と記されており早くも島庄の荒墓が蘇我馬子の桃原墓の可能性を指摘している。1772（明和9）年には本居宣長によって『菅笠日記』が著され、石舞台古墳については「嶋の庄といふ所には。推古天皇の御陵とて。つかのうへに岩屋あり。内は畳八ひらばかりしかる、広さに侍り。これも同じ方に。坂田村と申すには。用明天皇ををさめ奉りし所。みやこ塚といひて。これもそのつかのうへに。大きな岩の角。すこしあらはれて見え侍るなりとなんかたりける。」とあり石舞台古墳は推古陵で都塚古墳が用明陵ではないかと記されている。更に1792（寛政4）年には屋代弘賢の『道の幸』の中で「是れより東に入ハ島の庄村。右の畑中に大石をつミたるあり。土人はいはやといふ。古き墓穴のあはけたるならし」と記されている。1829（文政12）年に津川長道の『卯花日記』には「道の辺より少し東へのぼる所畑の中に石窟あり。大なる石を以てくミ立たるものなり。土ハのこりなく落て石ばかりハ残りたるなり。中を見るにすべて物ある事なし。内ハ畳八ひろはかり入ぬべし。いにしへの陵墓土をさりたれば、皆のこるさまなる物なるべし。此墓里人の申伝もなく、大和志にも荒墓と云り。若くハ馬子大臣をおさめたる桃原の墓にてハ不レ有哉、推古天皇三十四年馬子大臣薨仍葬二千桃原一墓と書紀にしるされたり。桃原といふ里今ハなし。」と石舞台古墳の被葬者について蘇我馬子ではないかと検討されている。1848（嘉永元）年には暁鐘成の『西国三十三所名所図会』には「島莊村の道の傍田圃の中にあり。すなわち岡に下る道の左に見ゆるなり。高さおよそ二間ばかり、周およそ十間ばかり。大石を以て積みかさねしものなり。伝へて云ふ、天武天皇を仮りに奉りし古趾なりとぞ。」とあり、天武天皇の殯宮ではないかと記されている。1893（明治26）年に野淵龍潜の『大和國古墳墓取調書』には「高市村大字島ノ庄字塚ノ脇ニ在リ 村人ハ本墳ヲ指シテ石ノ舞臺ト呼ブ塚ハ巨石数多ヲ累疊シ内ハ空洞トナリテ田畑ノ間ニ人立セリ是全ク石窟ノ破壊セラレテ玄室ノ露出セシモノナラン四邊皆平坦ニシテ阜丘ノ痕跡モアラズ由是觀之其破壊ハ遠ク往昔ニ在リシナラン其形状普通ノモノニアラスト雖ドモ惜ムラクハ口碑傳説其他考証ニ資スベキモノナキヲ以テ考查スルヲ得ス尚他日ノ詳查ヲ要スルモノト考フ」と記されている。1912（明治45）年には喜田貞吉の「蘇我馬子桃原墓の推定一稀有の大石槨、島の庄の石舞臺の研究」（『歴史地理』第19巻第4號）で「種々の事情を綜合して、而して之に対して此の墓が斯く日本に一二を争ふ程の巨大なるものなりとの事實は桃原墓と此の石舞臺とを接近せしむるに十分有力なる證據となるべきものなりとす。」と述べられており石舞台古墳が蘇我馬子の桃原墓の可能性について言及している。1915（大正4）年には『高市郡史料』が刊行されその中に「石舞臺は高市村大字石舞臺に在りて多武峯街道の西傍にあり。南面にしてもとは一大圓墳なりしもの、如きも、今は覆土の全部を失ひて石槨の構造中



第2図 石舞台古墳位置図

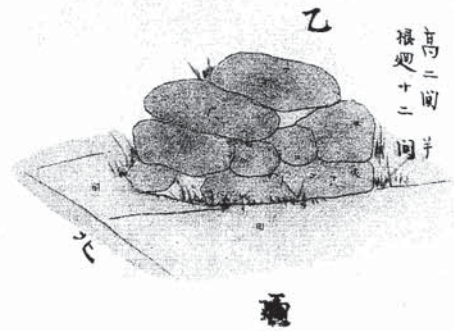


第3図 石舞台古墳周辺地籍図

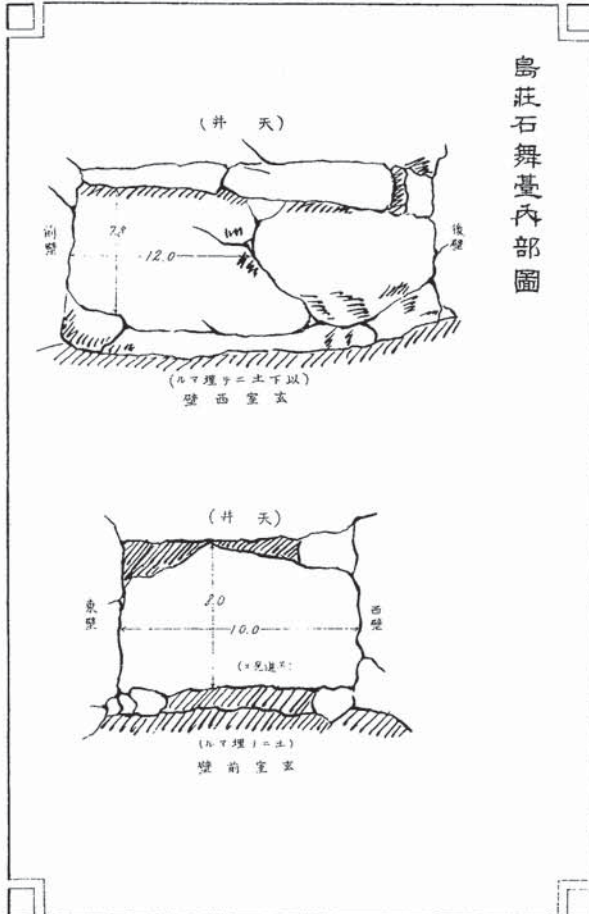


第4圖 西國三十三所名所圖會

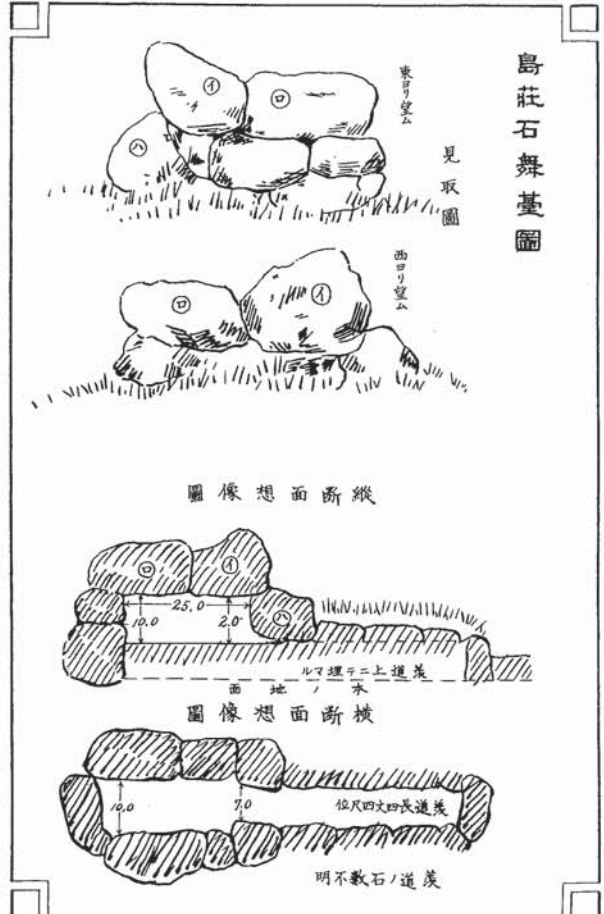
第五九二號
高野郡高野村大字島庄
子塚ノ肥
一畝野及別ノ畝三歩
民有地

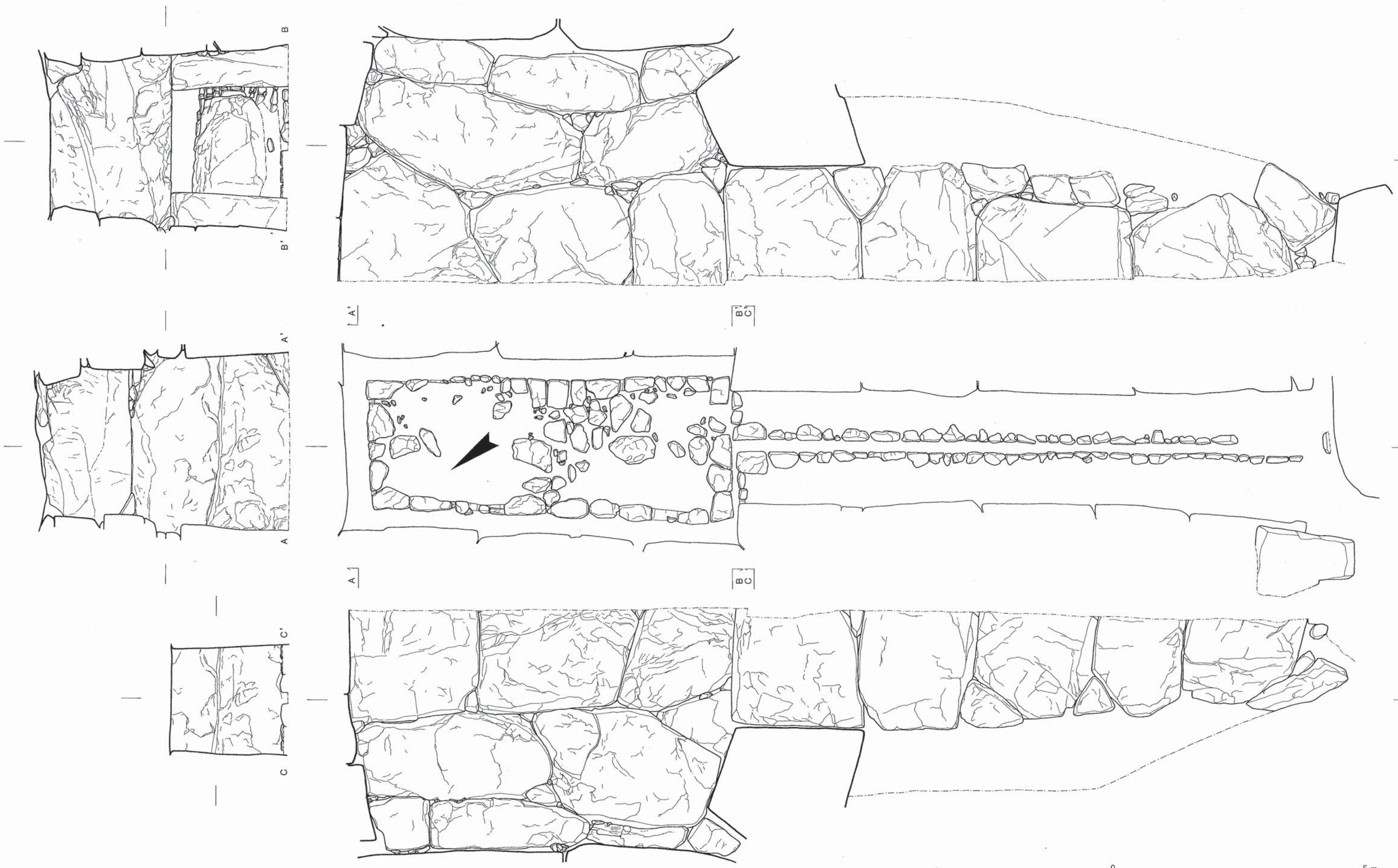


第5圖 大和國古墳墓取調書



第6圖 島莊石舞臺圖・島莊石舞臺內部圖 (『大和志料』)





第7图 石舞台古墳石室実測图 (1:70)

高さ部分のみかドルメンとなりて田圃中に露出せり。内部は石材の間隙より流れ込める土砂にて深く埋り羨道の如きも其の入口塞かりて這ひ入ることすら能はず、唯玄室の右壁と後壁との間隙より纔に内部入ることを得るに過ぎず。玄室は長約二丈五尺幅約一丈にして高は現在露出せる部分のみにて約一丈あり。次に羨道の幅約七尺高は玄室に接する部に於て約二尺露出せるか故に之に埋没せる部分を加ふれば更に深さを増すへきなり、長は上部の芝地の長三丈六尺之に玄室前部の石の大きさなどを加へて推算するに大約四丈四尺となる、斯くて羨道の入口より玄室の奥壁までの総計約六丈九尺となるなり。石材は花崗岩質片麻岩の久しく溪流の為に侵蝕せられ其の稜角を失へるものにして比較的平滑なる面を内壁に使用せるなり、其の用石の大なる後部天井石の如きは長一丈七尺幅一丈五尺高約九尺に達せるものあり。抑、石槨の大なるものを擧ぐれば先づ指を白檀村大字五條野字塚の脇なる丸山の石槨に屈せざるへからず。此の塚嘗て天武持統兩天皇合葬陵たる檜隈大内陵に擬定せられしことありしか、今は御陵墓傳説地として保管上石槨入口を塞かれたるを以て其の内部を見ること能はず。然るに石舞臺の石槨たる番に其の規模の壮大なるのみならず、巨石のみを使用して築造せられ且つ覆土の全部を除去せるか為に石材の結構を能く観察するを得るは考古學上最も貴重なる標本の一たるへきなり。」と記されている。1925（大正14）年に刊行された『奈良縣史蹟勝地調査會報告書』には「石舞臺（狐舞臺） 周囲田 高市村 大字島庄 字脇ノ脇 253番地 地目原野 面積1畝03歩 廣袤南西四間 南北六間 所有者鳴庄共有」と記されている。昭和8年と10年には京都大学考古学研究室による本格的な調査が実施され、調査の結果、一辺約60mの二段築成の方墳又は上円下方墳で埋葬施設は巨石を用いた南に開口する横穴式石室であることが明らかとなった。石室内外から土師器、須恵器、鉄鏃、金銅製帯金具、金銅製尾錠、金銅製菊座金具、凝灰岩等が出土している。凝灰岩片については玄室東南隅から出土しており、家形石棺の一部と考えられている。昭和12年・昭和34年には保存整備事業の一環として墳丘及び周濠、外堤等の調査と復元整備が行われ、現在に至っている。昭和10年12月24日には国史跡に、同27年3月29日には特別史跡に指定されている。

2、測量調査報告

石室は細川谷流域から採石した角閃石黒雲母石英閃緑岩を使用した南西に開口する両袖式の横穴式石室である。石室規模は全長約19m、玄室長は左右各側壁で7.75m、主軸で7.7mを測る。幅は奥壁3.5m、中央3.44m、袖部3.7mである。高さは4.8mを測る。羨道は右側石19.15m、左側壁19m、主軸で19.6m（転落した天井石まで）となる。幅は玄門部が2.22m、中央部2.1m、羨門部が2.57mである。高さについては玄門部で2.25mを測る。

玄室の壁面は奥壁が二段積みで左右各側壁は三段積みとなっている。石材は左側壁が7石、右側壁が10石、奥壁が2石から構成されており、隙間にも石材が充填されている。天井石は巨石2石で構成されている。玄室床面には四方を人頭大の川原石で囲み内側にも石材を充填した石床状を呈しており、規模は長さ7.6m、幅奥壁側2.5m、中央2.7m、玄門側2.78mを測る。周囲には排水溝が設けられており左右の溝幅約30cm、深さ20cm、奥幅約45cm、深さ各20cmとなる。玄室内の水の流れは右側壁から奥壁、左側壁裾から玄門部に至り、更に羨道中央に設けられた幅約60cm、深さ約20cmの排水溝へ流れる仕組みとなっている。また石床状の下が暗渠となっており羨道の排水溝へと繋がっている。羨道の側壁は一段一石積みで左右各5石から構成されており、天井石との隙間には逆三角形を呈した石材を充填したいわゆる矢筈積み技法を用いて

いる。天井石は前壁以外すべて失われている。この前壁は玄室側に斜めに架構されており、前壁の高さは約2mを測る。羨道中央には玄室から伸びる幅60cm、深さ40cmの排水溝（開渠）が存在する。羨門部には天井石が落ち込んで入口を塞いでいる。

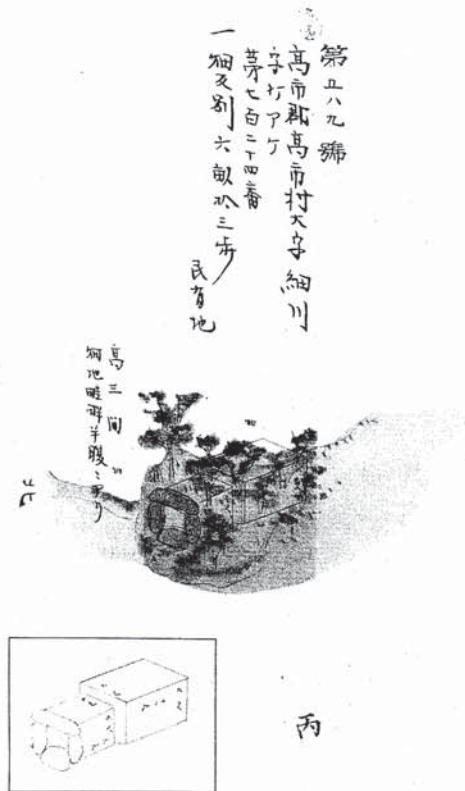
第3節 打上古墳測量調査報告

1、はじめに

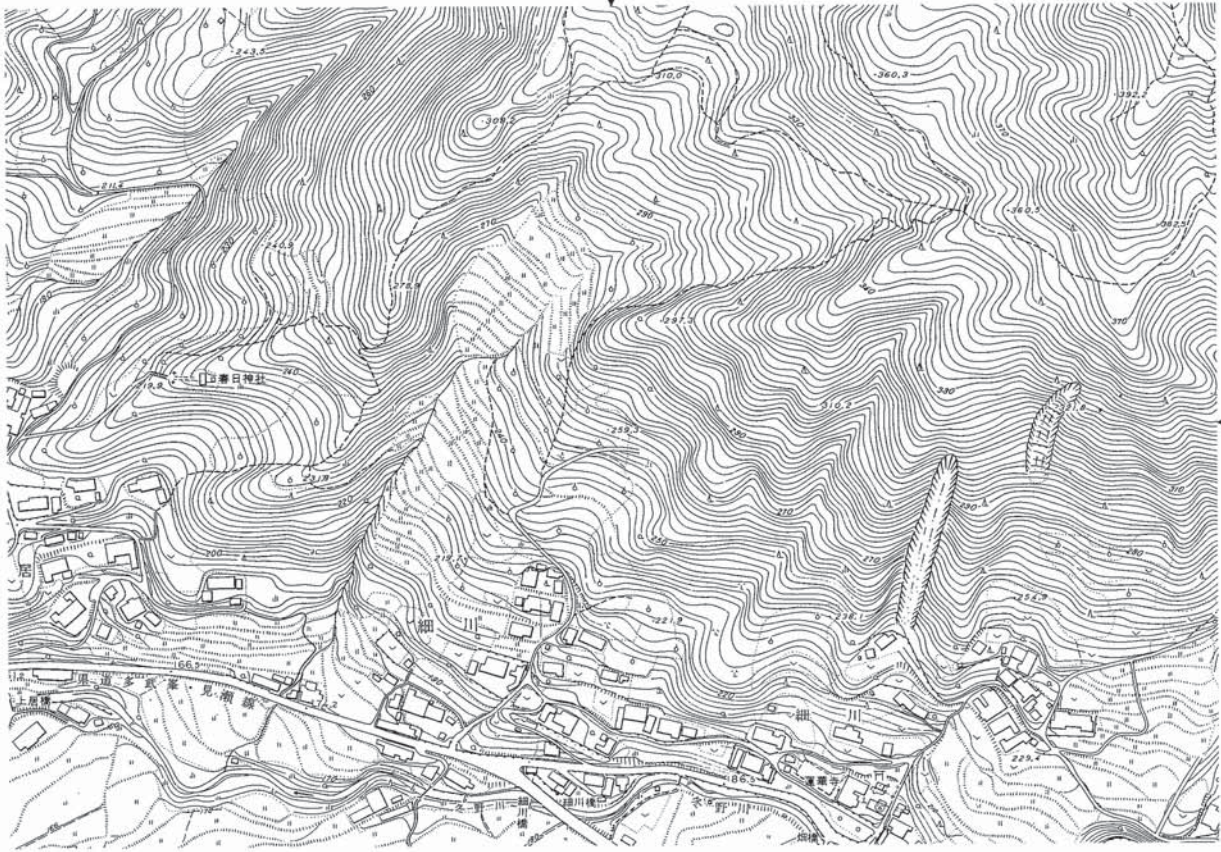
打上古墳は奈良県高市郡明日香村大字細川小字打アゲ724番地に所在する終末期古墳である。本墳は冬野川流域に広がる細川谷古墳群の一角に位置している。細川谷古墳群は明日香村大字上居・細川・上・尾會・阪田に200基以上もの古墳が冬野川を挟んで分布しており、右岸には凝灰岩の削り貫き石棺を有する上居49号墳や大正時代に剣が出土したとされる七曲塚古墳、そして大量の馬具やミニチュア炊飯具等が出土した上5号墳等が点在している。左岸については調査例もなく詳細については不明であるが堂ノ前塚古墳では明治年間に玄室内から結晶片岩の箱式石棺や須恵器、馬具、そして鉄鈴等が出土している。また貝成組田古墳でも結晶片岩の箱式石棺が存在することが確認されている。

打上古墳については1893（明治26）年刊行の『大和國古墳墓取調書』に「高市郡高市村大字細川字打アゲト呼ブ石窟アリ羨道ハ破壊せられて僅ニ存セリ玄室ハ三間ニ一間三尺アリ古制ニ適フモノト考フレドモ考証ナキヲ以テ是亦考査スルヲ得ス」と記されている。

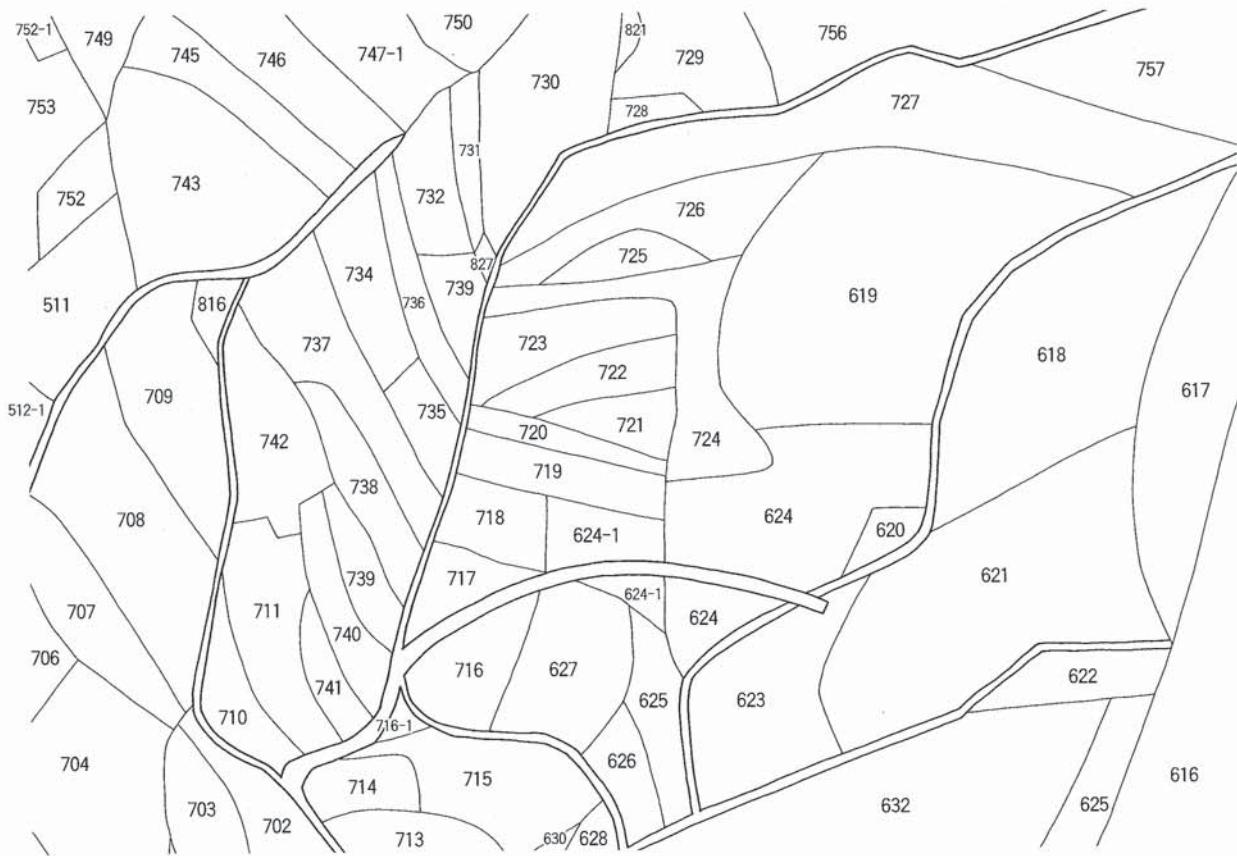
1923（大正12）年には『高市郡古墳誌』が刊行され、そこには「大字細川の民家西端から北へさして約一町許行くと、畑の中に巨石がある。もとここにも石槨を有する一大圓墳があったが、何れの世にか破壊されて、その羨道の一部分だけ残って、この巨石が羨道の天井を成しているやうに思はれる。現今はこの周囲は畑地である。これから又一町許足を運ぶと山の際に塚がある。即ち東北の二方は櫟林で西方は畑地に接し南方は絶壁をなし、塚上は開墾されて畑地となつて居る。抑々細川の地は史上に名高い細川山の南腹に懸り地甚だ險岨である。打上の地は其の西部上方にあるから險悪なることが知られる。かかる困難なる地に巨大なる石材を集めて一大石槨を築造されたのは、容易なことではないと思はれる。以て高貴の墳墓であつた様に思はれるが、惜しい事には石槨内には一物をも留めないのである。この古墳の高さは七間半、長径二十間、短径六間半、面積約二畝歩ある。玄室の長さ地上で一丈六尺八寸、同天井際で約一丈五尺、幅中央で八尺八寸高さ入口で七尺三寸中央で七尺七寸あつて、天井石は三枚から成つて居る。天井の上部は畑地であるから、降雨ある毎に雨滴が天井から落下して内部地上に雨滴の點跡を止めて居るが今にして相富保存の道を講



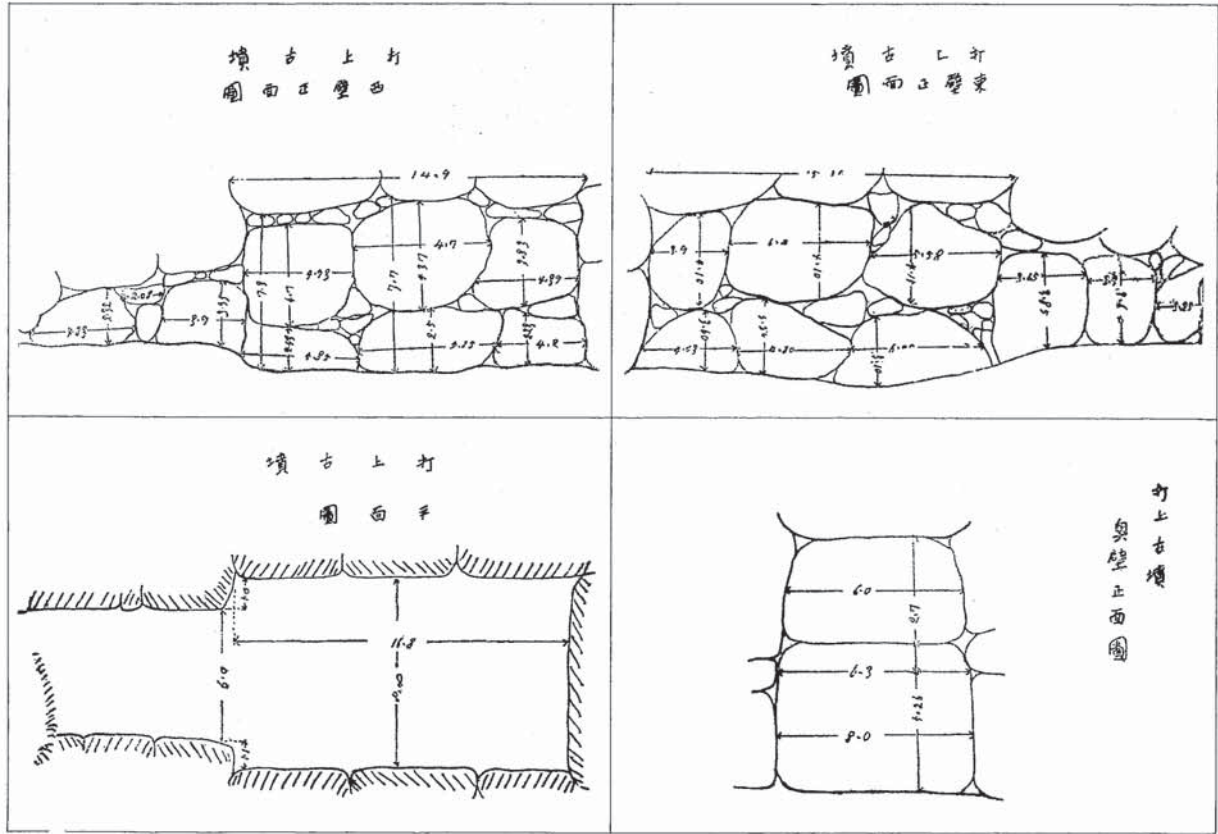
第8図 大和國古墳墓取調書



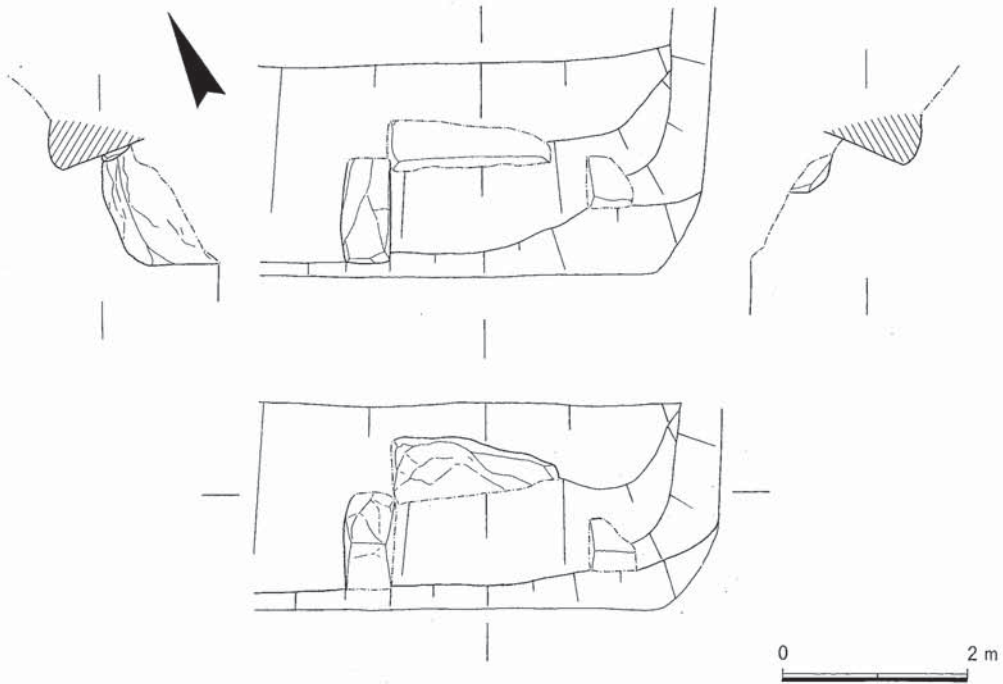
第9図 打上古墳位置図 (1 : 5000)



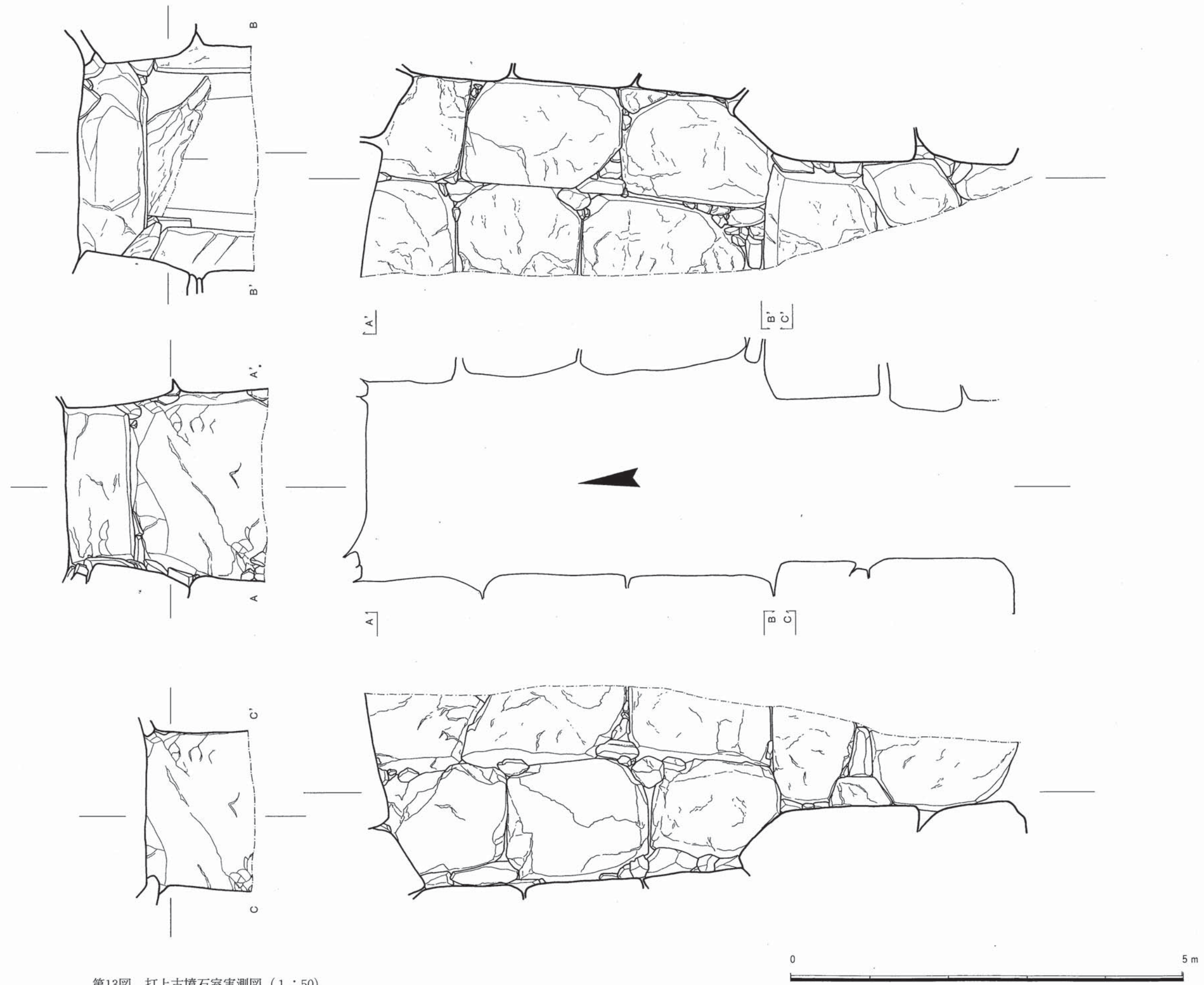
第10図 打上古墳周辺地籍図



第11図 打上古墳石室図 (『高市郡古墳誌』)



第12図 細川墓ノ下古墳石室略測図



第13图 打上古墳石室実測图 (1:50)

じないと遂に崩潰の虞ないとはいはれないのである。羨道は南に開け最初の天井石は破壊されて半は陥落し粘土と共に入口を塞いで居るがその間隙から纔に入ることが出来る。而して陽光の透入がせ少いから、燈火なくしては槨内の状態を明かに見ることが出来ない。古来遺物を発見した事など傳へて居ない。又信憑すべき傳説の何物をも留めないのは頗る遺憾とする所である。」と詳細に記されており略図も添付されている。また1925（大正14年）刊行の『奈良縣史蹟勝地調査會報告書』には「打上塚 圓形 畑 高市村 大字細川 字打上 番地716 地目畑 面積3畝02ノ内歩 廣袤東西貳間 南北貳間 民有」と記されている。1974（昭和49）年に刊行された『奈良県の主要古墳Ⅱ』には石室の壁面構成から「明日香村岩屋山古墳例にきわめて近く、桜井市秋殿南古墳、同文殊院東古墳の石室とともに、岩屋山式の横穴式石室に先行する型式の石室をもつ大阪府太子町葉室石塚古墳出土須恵器の型式などから、7世紀前半の築造にかかるものと考えられる。」と記されている。打上古墳については早くから石室が開口しており、出土遺物等については知られていない。現状では玄室右側壁の裏側の土砂が流出して失われており、石材が露出した状態となっている。また石室内には降雨の影響で雨水とともに墳丘土も流出して玄室内に堆積するなど打上古墳を取り巻く環境の悪化は日々進行しており、早急な対策が望まれる。よって今回、石室内の現状を把握することを目的として実測調査を実施した。

2、測量調査報告

石室は南に開口する両袖式の横穴式石室で全長8.4m以上を測る。玄室は二段積みを基調として上下段3石で構成されている。奥壁は上下段各1石で上段の石材は内傾している。玄室規模は長さ5.1m、幅2.5～2.6m、高さ2.5mを測る。天井石は3石で構成されている。羨道は一段一石積みで現状では右側壁2石、左側壁3石が残存している。規模は現状で長さ3.2m以上、幅2.1m、高さ1.4mを測る。天井石は現在2石が架構されており、羨門側の天井石1石が羨道内に落ち込んでいる。前壁は玄室側に斜めに架構されており高さは約80cmを測る。羨道長については不明な点も多いが左側壁の延長線上に石材が数点存在しており、これを羨道の側壁と考えると羨道長は約10mとなり、全長は約15mとなる。現在、石室内には大量の土砂が堆積しており石室基底からの正確な数値を得ることができない。

3、細川墓ノ下古墳測量調査報告

細川墓ノ下古墳は打上古墳の北東約50mに位置し、細川大字の集団墓地の南側斜面に存在している。現在は打上古墳から墓地へ通じる道はコンクリート舗装されており、この道端に玄室奥壁と考えられる石材の一部が露出している。石材はコ字形に配置され奥壁と推定される石材は内傾している。規模は残存長1.2m、幅2m、高さ1.6m以上を測る。露出している石材の場所と道を挟んだ南側斜面には破壊された石室材と考えられる石材が存在することから南に開口する全長3m以上の横穴式石室であったと考えられる。露出している石材の状況から判断して石室の大半は破壊されていると考えられる。しかし奥壁と推定される石材が内傾しており天井石に近い石材と考えると石室基底面は残存している可能性がある。

【引用・参考文献】

野淵龍潜1893『大和國古墳墓取調書』

喜田貞吉1912「蘇我馬子桃園墓の推定—稀有の大石槨島の庄の石舞臺の研究」『歴史地理』第10巻第4号

高市郡役所1914『高市郡史料』

高市郡役所編1925『高市郡古墳誌』

奈良縣1924『奈良縣史蹟勝地調査會報告書』第8回

京都帝國大學1937『大和島庄石舞臺の巨石古墳』京都帝國大學文學部考古學研究報告14

白石太一郎1974「明日香村打上塚古墳」『奈良県の主要古墳Ⅱ—緑地保全と古墳保護に関する調査報告2』奈良縣教育委員會

飛鳥資料館編1981『飛鳥時代の古墳』奈良国立文化財研究所飛鳥資料館図録

第3章 飛鳥周辺の測量調査

第1節 地理的・歴史的環境

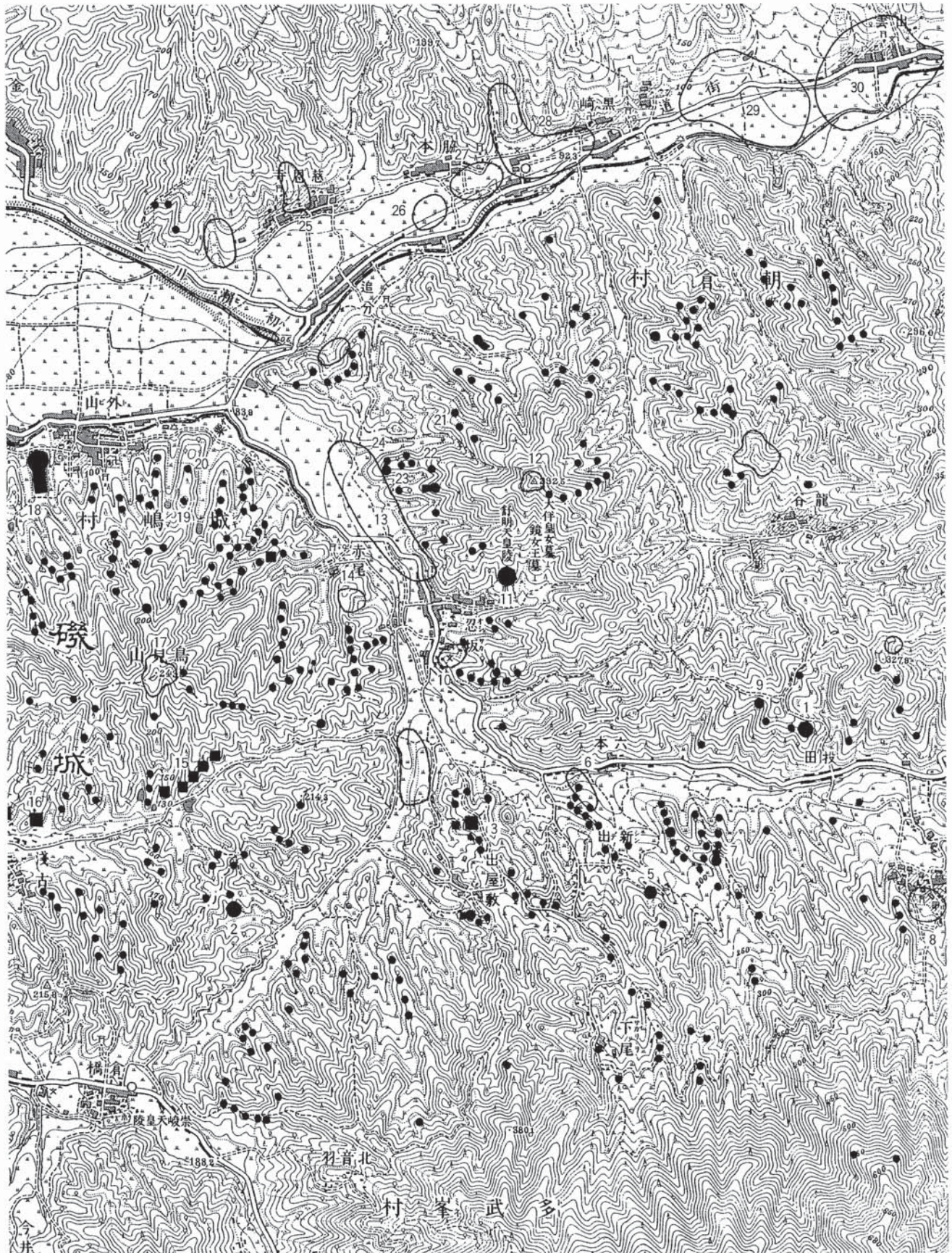
【地理的環境】

桜井市は奈良県北部を占める奈良盆地の東南部と大和高原、宇陀山地、吉野山地の一部に位置している。昭和31年9月、旧桜井町を中心として大福村、香具山村を合併して市制が実施され、さらに昭和34年に初瀬町、昭和38年に大三輪町を合併して市域を形成し現在に至っている。桜井市の面積は98.93平方kmで東北端から南端間は約17km、東北端と西北端間は約12km、西北端と南端間は11kmの不規則な三角形の形状を呈している。

市中央部北側には笠置山地、初瀬谷（初瀬・宇陀川断層谷）を望み、南部には宇陀盆地、吉野川構造谷と接する領家変成岩の花崗岩の地質よりなり、大和盆地と宇陀とを分ける竜門山地が連なっている。初瀬谷の入口部には、慈恩寺、脇本、黒崎、出雲の各集落があり、吉隠川との合流点には長谷寺の門前町、吉隠川に沿って馳向、与喜浦、吉〇、角柄の集落、忍坂、栗原の谷には忍坂、赤尾、栗原の集落が所在する。また初瀬谷には桜井市と都祁村境を源として吉隠川、巻向川等と合流しながら大和川へと繋がる初瀬川が市域を南北に分断するように流れ込み、その初瀬川を主軸として鳥見山（245m）より流入する栗原川、寺川、三輪山（467m）より流入する巻向川とともに扇状地を形成している。この複合扇状地上には遺跡が多く営まれていることから、古くからの開発が進んでいたことが窺える。また、この地域は春日山断層、初瀬川構造谷、近江・伊賀大断層等が交錯し、東西南北方向に断層により複雑な地形を呈しながら山地と平地の傾斜変換線上部分に位置しているため古代から東国、北国、西国に通じる拠点として、また政治・経済・軍事上においても重要な地域、環境を有していた。現在でも大生産都市・消費都市である大阪・京都・奈良・三重へと通じる道路、及びJR、近畿日本鉄道が放射状に走る交通の要衝の地である。

【歴史的環境】

鳥見山、外鎌山周辺には多くの遺跡が点在している。縄文時代には初瀬谷を中心に朝倉遺跡から草創期の有舌尖頭器が表採されており、初瀬遺跡からは早期の押形文土器が出土している。弥生時代では脇本遺跡から後期の合口土器棺墓が出土している。古墳時代になると栗原カタソバ遺跡で5世紀後半の集落跡が検出され脇本遺跡では5世紀～7世紀にかけての掘立柱建物が忍坂遺跡からは6世紀代の掘立柱建物や柵列が確認されている。一方、古墳では鳥見山南麓には巨石を用いた秋殿古墳や磚積石室を有した舞谷古墳群があり、倉橋周辺には崇峻天皇陵とされる赤坂天王山古墳をはじめ大型円墳の越塚古墳、そして穹窿式横穴式石室を有したカタハラ1号墳をはじめ、切石を用いた精美な石室を有するエンドウ山1号墳が存在する。栗原川右岸



- 1、ムネサカ1号墳 2、エンドウ山1号墳 3、赤坂天王山古墳 4、カタハラ古墳群 5、越塚古墳 6、栗原カタツバ遺跡
 7、八ツ塚11号墳 8、粟原寺跡 9、粟原鳥ヶ谷古墳 10、石位寺 11、忍坂段ノ塚古墳 12、外鎌山城跡 13、忍坂遺跡 14、赤尾城跡
 15、舞谷古墳群 16、秋殿古墳 17、鳥見山城跡 18、桜井茶臼山古墳 19、大谷古墳 20、森谷山古墳群 21、外鎌山北麓古墳群
 22、忍坂10号墳 23、忍坂8号墳 24、忍坂9号墳 25、慈恩寺跡 26、脇本西遺跡 27、脇本遺跡 28、朝倉遺跡 29、出雲西遺跡
 30、出雲遺跡

第14図 鳥見山周辺遺跡分布図 (1:20000)

の忍坂には崇峻天皇陵とされる段ノ塚古墳や忍坂8号墳では六角形、同9号墳ではT字形の平面プランを持つ石室が確認されている。更に栗原から女寄峠にかけての尾根筋には岩屋山古墳と同一プランとされるムネサカ1号墳や奥室に扉石を有した磚積石室の花山西塚古墳や花山東塚古墳が点在し、鳥見山麓からこの地域にかけて存在する磚積石室墳の多様性は注目される。こういった終末期古墳とともにこの地域にも奈良時代以降、古代寺院が建立されるようになる。鳥見山の西方の阿部の地には阿部氏の氏寺とされる阿部寺跡があり、栗原には仲臣朝臣大嶋が草壁皇子の菩提を伴うために建立されたとされる栗原寺跡が存在する。忍坂10号墓からは金銅製の骨蔵器が鳥ガ谷古墓からは火葬骨を納めた薬古壺が出土している。南北朝期には鳥見山城や外鎌山城、竜谷城などの山城が多く築かれるようになる。17世紀には石位寺が創建され、本尊の三尊石仏は白鳳期の石仏として有名である。

第2節 ムネサカ1号墳測量調査報告

1、はじめに

ムネサカ1号墳は奈良県桜井市栗原小字峯坂417番地に所在している。古墳のある尾根裾には国道166号線が通り、女寄峠を介して宇陀郡内へと通じており初瀬越と並ぶ交通の要衝の地である。女寄峠の西方には流紋岩質溶結凝灰岩を使用した磚積石室墳の花山西塚・東塚古墳が存在している。ムネサカ1号墳の南方には塔伏鉢で有名な栗原寺跡がある。現在は地元天満宮に隣接した場所に塔心礎や礎石が残存している。談山神社には栗原寺三重塔の塔鉢盤があり、持統8(694)年に草壁皇子の菩提を弔うために仲臣朝臣大嶋が発願して、715年に三重塔の露盤をあげて完成したことが記されている。

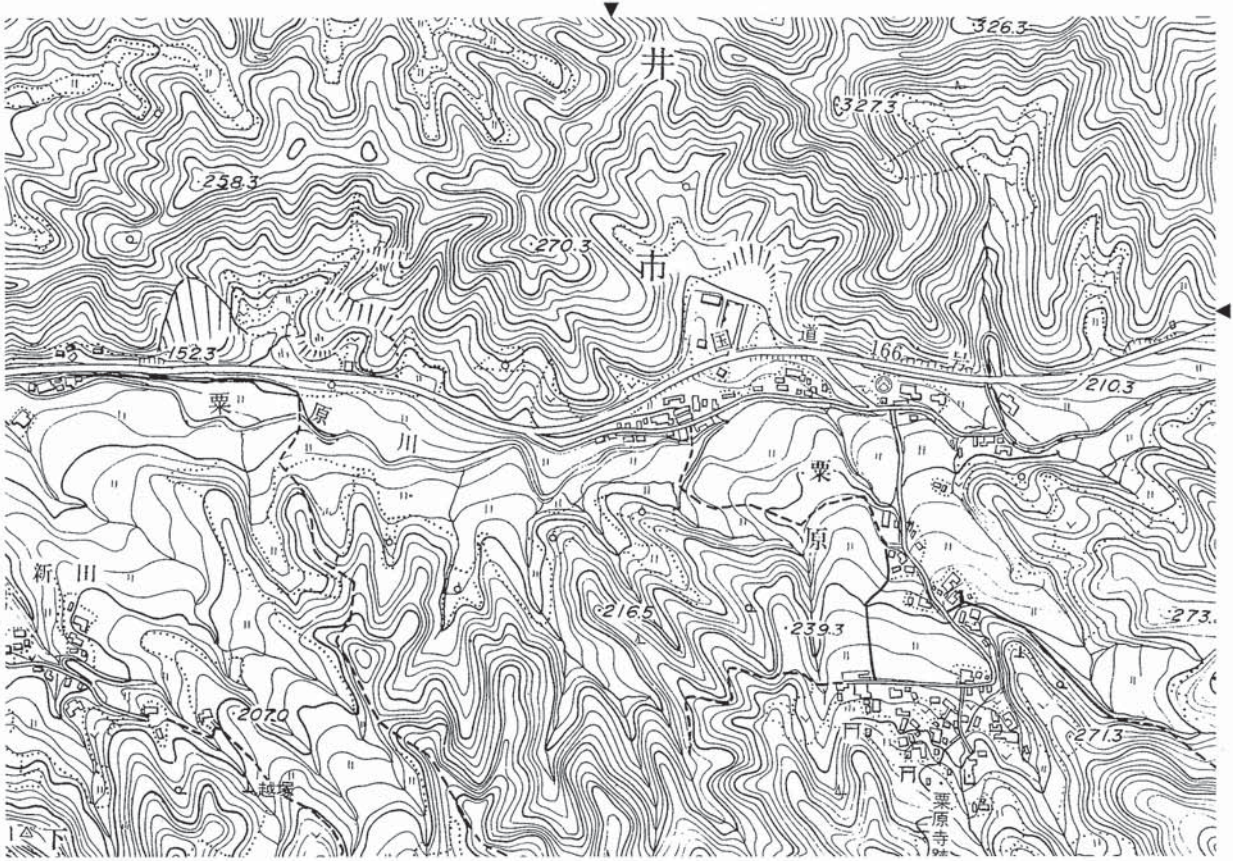
ムネサカ1号墳については昭和30年頃に石室内の土砂が搬出・清掃された。その後いくつかの機関によって測量調査も実施されたようであるが詳細については明らかとなっておらず今回、墳丘と石室の測量調査を実施した。

2、測量調査報告

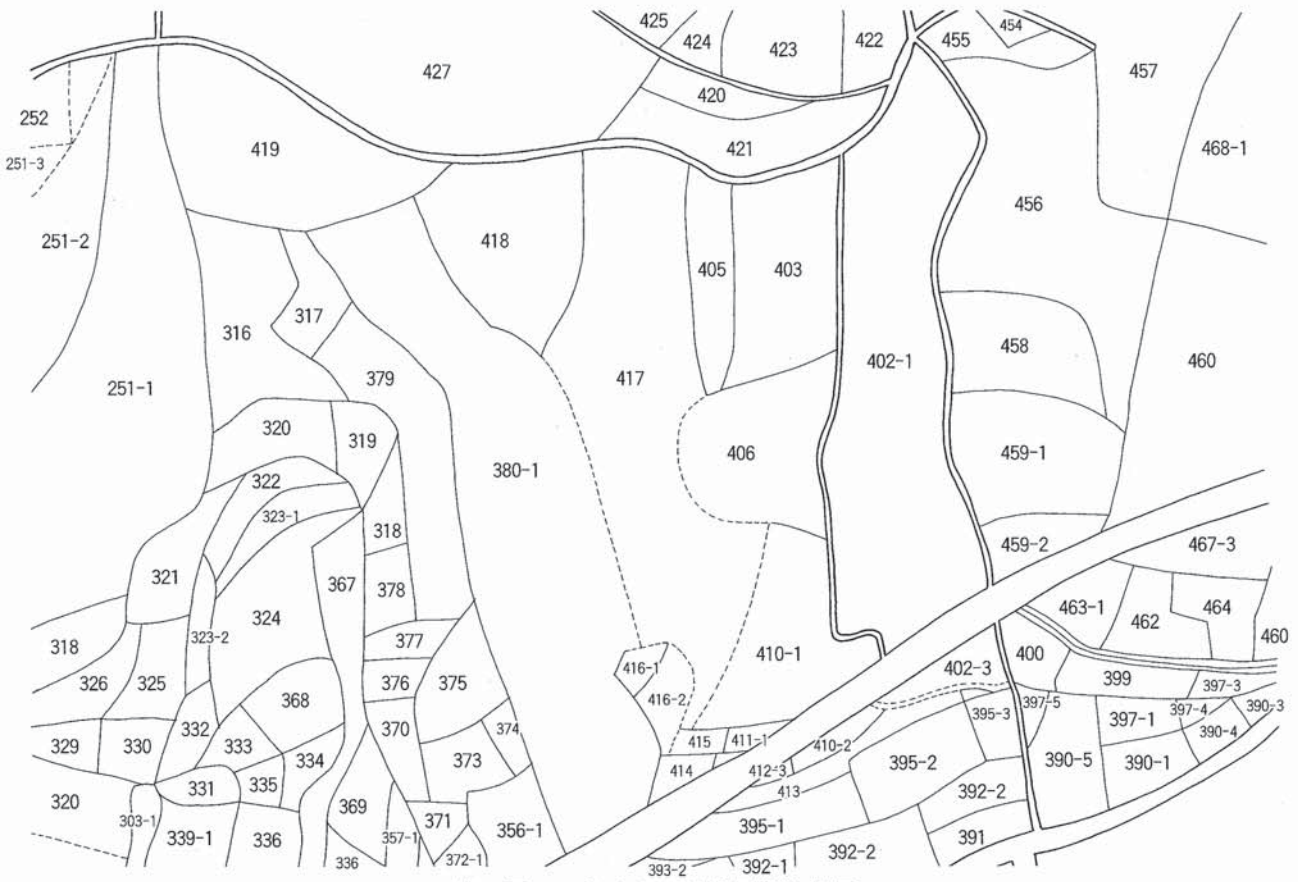
石室は墳丘の中央に造られた南に開口する両袖式横穴式石室で全長17m以上を測る。玄室は両側壁各5石(上段2石・下段3石)、奥壁2石を二段積みにして天井石は2石架構されている。玄室は長さ4.6m、幅2.5~2.64mで床面には人頭大の床石が部分的に残存している。この床石は各側壁方向に傾斜がつけられており排水機能を有していたと考えられる。天井石と側壁の間には漆喰が充填されている。羨道部は玄門から三石分は一段一石積みで羨門付近は二段積みとなっている。羨道の先端部の石材は斜めに加工されており、墳丘斜面の傾斜に合わせている。羨道内には土砂が厚く堆積しており、現状では羨道長12.5m、幅1.96mを測る。天井石は4石で構成されており前壁はV字状を呈した石材を用いている。前壁は斜めに架構されており、高さは約1mを測る。玄門部には長辺1.76~1.98m、端辺78~94cmの闕石が存在している。

3、表採遺物

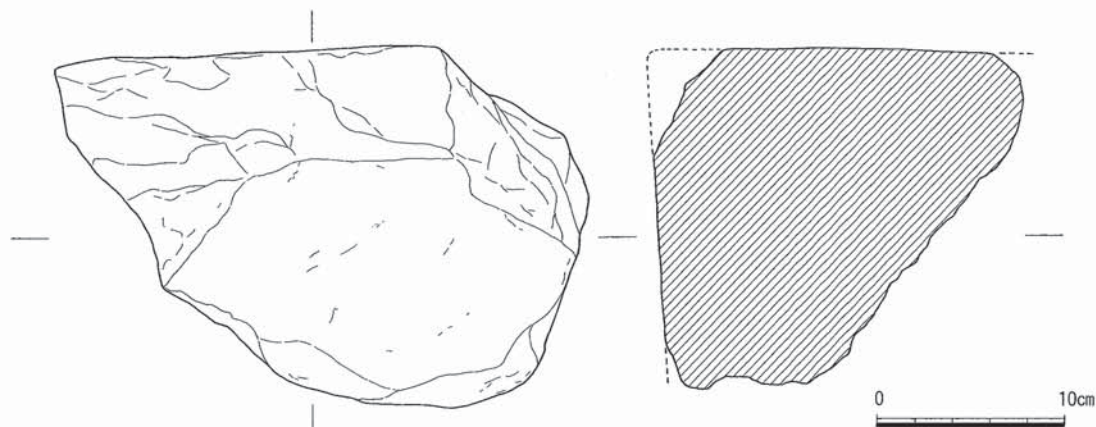
石室の前庭部の測量調査中、拳大の凝灰岩片を多数表採した。表採した中の一点は長辺14cm、短辺10cm大の凝灰岩片があり、二方向に面をもっており石棺材のコーナー部分の破片と考えられる。部位については二つの面が直角にならなく、一方がやや内側に加工されていることから家形石棺の縄掛突起の一部ではないかと考えられる。



第15図 ムネサカ1号墳位置図 (1:10000)



第16図 ムネサカ1号墳周辺地籍図



第17図 ムネサカ1号墳出土凝灰岩 (1:4)

4、石材分析

ムネサカ1号墳の石室内外から出土した石材について裸眼で観察を行った。

流紋岩質凝灰岩：色は白色である。構成粒は軽石である。軽石は白色、粒形が亜角～亜円、量が非常に多い。基質は白色緻密である。

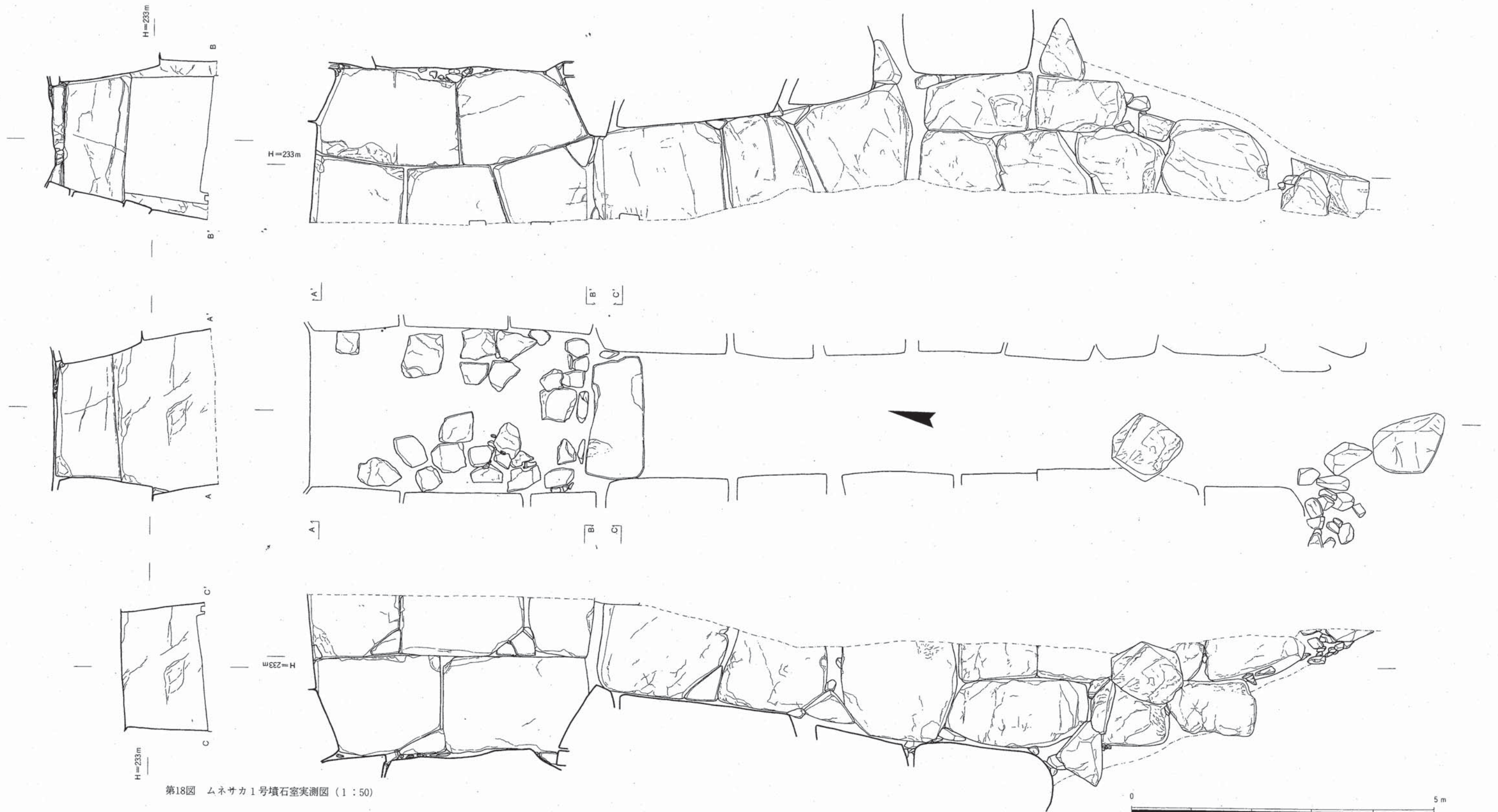
このような岩相を示す石は二上層群下部ドンズルボー層の最下部付近にみられる岩相に似ている。場所としては南河内郡太子町山田の鹿谷寺跡北方付近が採石地と推定される。

流紋岩質火山礫凝灰岩：色は白色である。構成粒は流紋岩・流紋岩質溶結凝灰岩・軽石である。流紋岩は青灰色、粒形が亜角～亜円、粒径が2～5mm、量がごくごく僅かである。石基がガラス質である。流紋岩質溶結凝灰岩は黒色・褐色のものがある。黒色の流紋岩質溶結凝灰岩は粒形が亜角、粒径が2～5mm、量が僅か、石基がガラス質である。褐色のものは粒形が亜円、粒径が2～20mm、量が中である。軽石は白色、粒形が亜角、粒径が2～30mm量が中である。基質は白色、緻密である。このような岩相を示す石は二上層群下部ドンズルボー層の溶結していない岩相に似ている。場所としては南河内郡太子町山田の鹿谷寺跡北方付近が採石地と推定される。

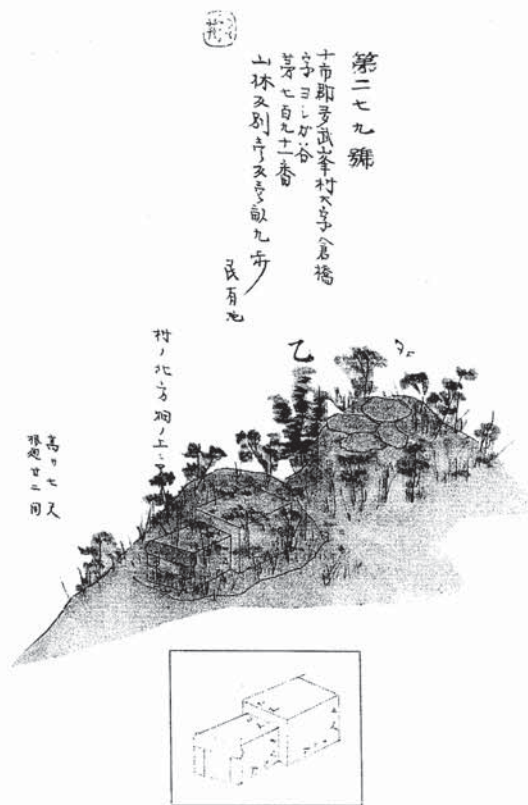
第3節 エンドウ山1号墳測量調査報告

1、はじめに

エンドウ山1号墳は奈良県桜井市倉橋字吉ヶ谷790番地に所在する終末期古墳である。南東方向には奈良県でも最大の倉橋溜池が広がっている。周辺には一辺約45mで大型横穴式石室内には家形石棺を安置した赤坂天王山古墳や穹窿式横穴式石室を有したカタソバ古墳など多くの古墳が点在している。エンドウ山1号墳は早くからその存在が確認されており1893(明治26)年に刊行された『大和國古墳墓取調書』には「十市郡多武峯村大字倉橋字ヨシガ谷ニ在リ 大半破壊セラレ又タ其三分ノト思フ程ノ處迄ハ埋没シアリ目ニ露出セル分ハ総テ切石ヲ以テ畳三天井石モ切石を以テ覆ヘリ他ノ天然形石ニテ築造シタルモノト同一ニアラズ 他ニ考証ニ供スヘキ材料ナキモ尋常ノ塚ニアラザルベシト認ム 本塚ノ北ニ三箇ノ石窟ノ址アレドモ皆破壊シテ唯巨石ノ散逸シアルノミ此等ハ或ハ陪塚ナラン歟」と記されている。また1925(大正14)年刊行の『奈良縣史蹟勝地調査會報告書』には「ヨシガ谷 多武峯村 大字倉橋 字ヨシガ谷 791番地 地目山林 面積0六歩 民有」と記されている。今回、飛鳥地域の終末期古墳を



第18図 ムネサカ1号墳石室実測図(1:50)



第19図 大和國古墳墓取調書

【引用・参考文献】

野淵龍潜1893『大和國古墳墓取調書』
 奈良縣1924『奈良縣史蹟勝地調査會報告書』第8冊
 小島俊次1958『古墳—桜井市古墳綜覧—』桜井市文化叢書1

第4章 総括

今回、石舞台古墳とムネサカ1号墳を含む4基の横穴式石室の実測調査を行った。報告した4基の古墳は大和を代表する古墳であることは言うまでもなく横穴式石室の形式学的な変遷を考える上で重要な古墳である。石舞台古墳についてはかつて白石氏によって石舞台式として標識が設定された古墳で谷首古墳や茅原狐塚古墳、秋殿古墳（以上、桜井市）や塚穴山古墳（天理市）などがこの形式に含まれている。石室形態については玄室奥壁が二段積みで玄室側壁は2～3段積みで構成され、羨道は一段一石積みを基調としている。石舞台古墳では逆三角形を呈した石材を天井石との間に充填した矢筈積み技法が採用されている。また前壁は一石で巨石が用いられ斜めに架構されており袖石がしっかりと支えている。ムネサカ1号墳と打上古墳については岩屋山古墳を標識とする「岩屋山式」に含まれるとされ切石技法が採用される段階のもので、石室形態については二段積みを基調としながらも一段一石積みも認められる。左右の側壁は上下段とも2～3石の石材からなり、天井石は1～2石で構成されている。使用されている石材も切石の精粗はあるものの石舞台式よりも切石技法が進んでおり立面形態も側壁が3段積みから2段積みに移行するのに伴い玄室高が低く設定されるようになる。ムネサカ1号墳の前壁についてはV字状の石材を架構されているが、横長の袖石が天井石を支えているものの

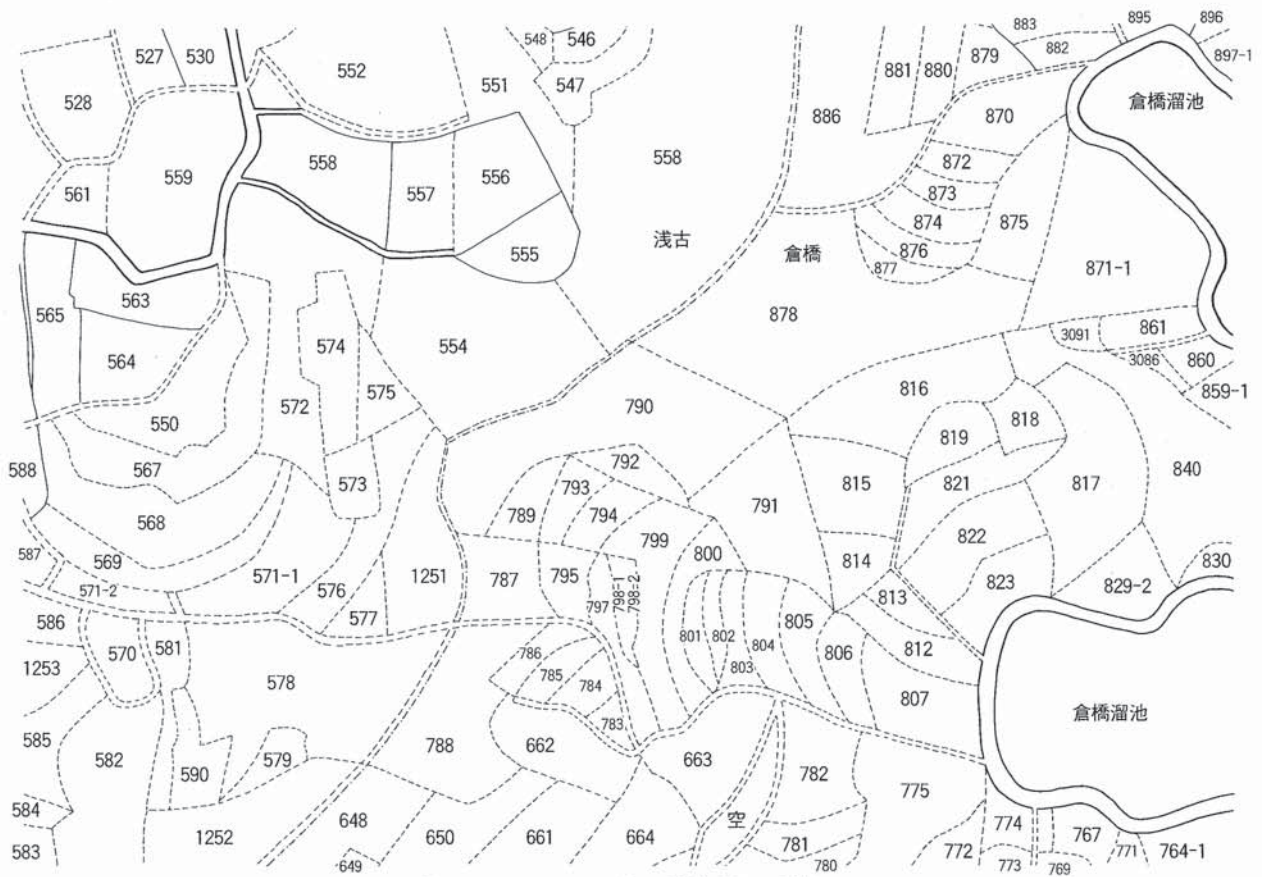
考える上で重要な位置を占めることから実測調査を行った。

2、測量調査報告

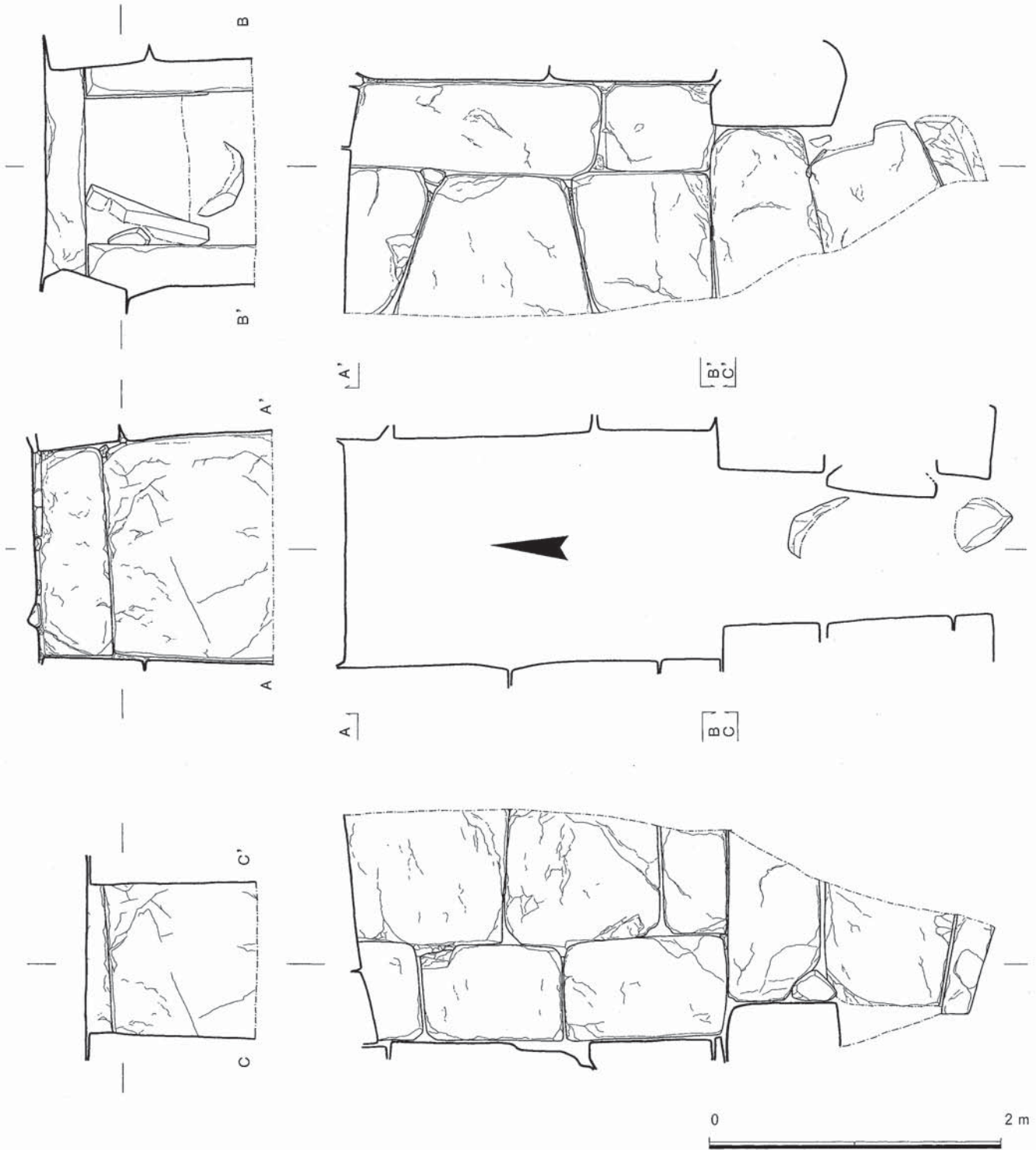
石室は精美な切石を用いた南に開口する横穴式石室で全長4.67mを測る。玄室は二段積みを基調とし右側壁は上段2石、下段3石、左側壁は上下段各2石で構成されている。天井石は2石架構されている。天井石と奥壁の間には流紋岩質溶結凝灰岩が使用されており漆喰が充填されている。玄室規模は長さ2.72m、幅1.55m～1.6m、高さ1.65mを測る。羨道は1石積みとなっており左右の側壁は各3石で構成されている。左側壁の玄門から2石目の石材には逆L字状の加工痕が認められる。また羨道部には用途は不明であるが長さ約1.62mの石材が存在している。羨道内には土砂が厚く堆積している。



第20図 エンドウ山1号墳位置図 (1 : 10000)



第21図 エンドウ山1号墳周辺地籍図



第22図 エンドウ山1号墳石室実測図 (1:40)

当該期の古墳の前壁構成と比較しても異なった使用法であり、ムネサカ1号墳を考える上で重要な要素の一つと考えられる。エンドウ山1号墳については石室規模は小型ではあるものの精美な切石を用いた二段積みを基調とした横穴式石室で、左右の側壁は左側壁上段2石、下段3石、右側壁は上下段各2石で構成された岩屋山式に属する古墳である。この古墳はあまり取り上げられることは少ないが当該期の切石を使用した横穴式石室を考える上でも重要な位置を占めている。またエンドウ山1号墳では漆喰が使用されており、漆喰の中には石灰岩の小片が確認されるなど漆喰の主原料が貝灰ではなく石灰岩の可能性があり舞谷3号・4号・5号墳とも漆喰の主原料に石灰岩が使用されている。またムネサカ1号墳と岩屋山古墳では使用されている漆喰の主成分の分析値が極めて近いことから石室形態とともに両古墳の関連が注目されている。羨門部の構造ではムネサカ1号墳とエンドウ山1号墳で羨門部の石材が墳丘の傾斜に合わせて加工されるなど「墳丘外明示」が認められ、岩屋山古墳や西宮古墳でも認められこの当該期の特徴を備えていることがわかる。今回、石舞台と岩屋山式の二つの形式の横穴式石室の実測を通して新たな知見を得ることができた。紙面の都合上、詳細は後稿に期することとして今後の課題としたい。

【引用・参考文献】

安田博幸1984「古代赤色顔料と漆喰の材質ならびに技法の伝統に関する二、三の考察」『橿原考古学研究所論集』第7 吉川弘文館

村社仁史1994「七世紀古墳への一視点からの考察」『花園史学』第15号 花園史学会

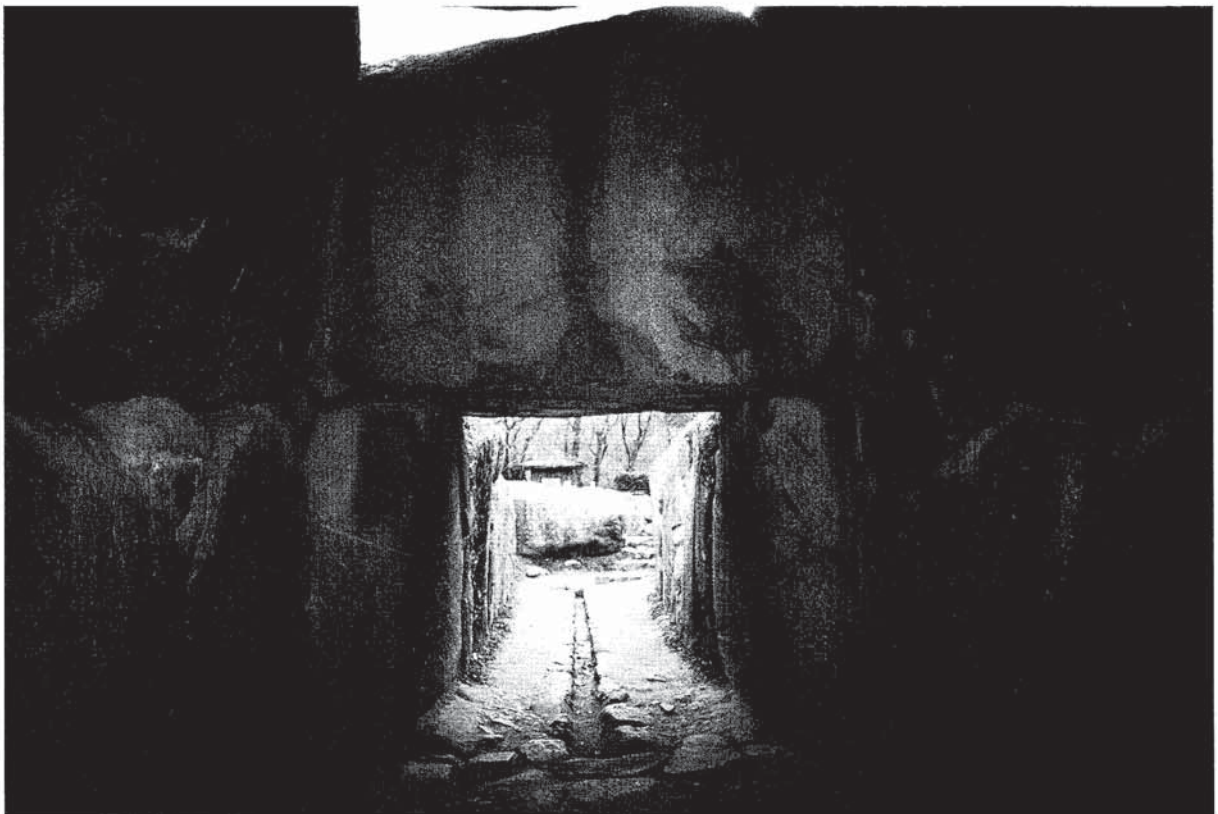
追記

昨年7月29日、関西大学名誉教授で明日香村名誉村民であられた網干善教先生が鬼籍に入られた。網干先生には筆者が明日香村に勤務した平成9年から公私にわたりご指導・ご教示を賜りました。今回報告した石舞台古墳も網干先生が考古学の道に進まれた契機となった古墳でもあり先生からまだまだ多くのことを学びご指導いただきましたかったがそれもかなわない。小稿をご霊前に捧げ、ご冥福をお祈り致します。合掌。

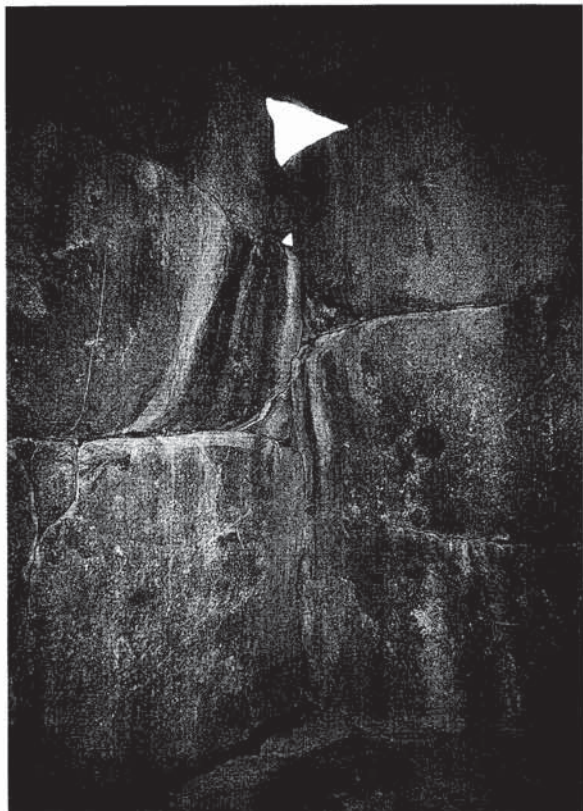
圖 版



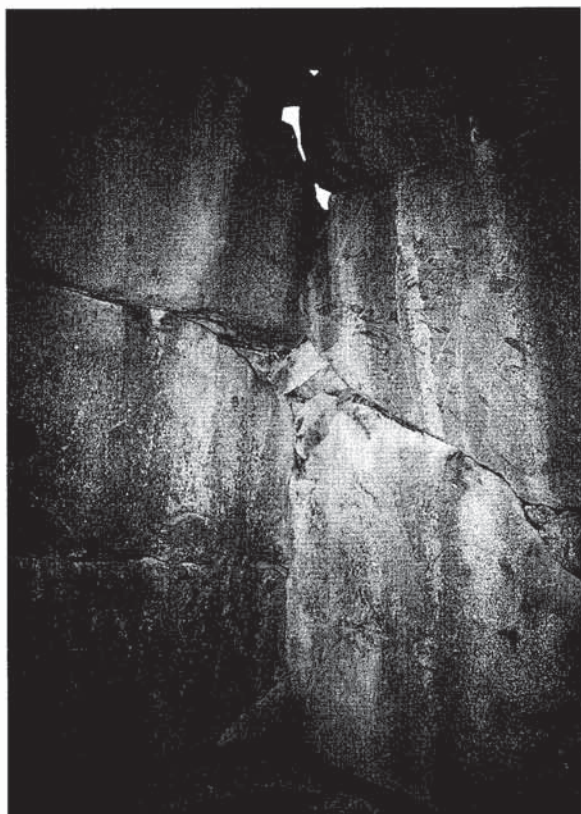
奥壁



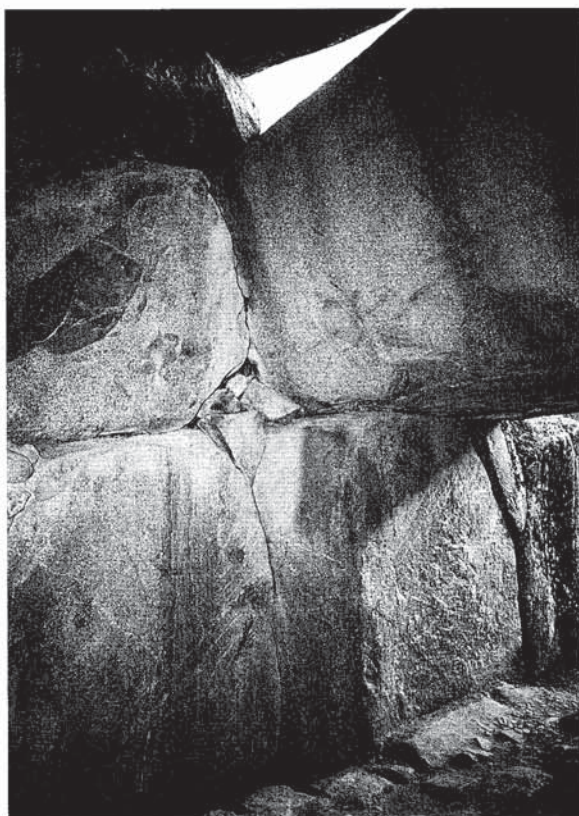
玄門



玄室北西隅



玄室北東隅



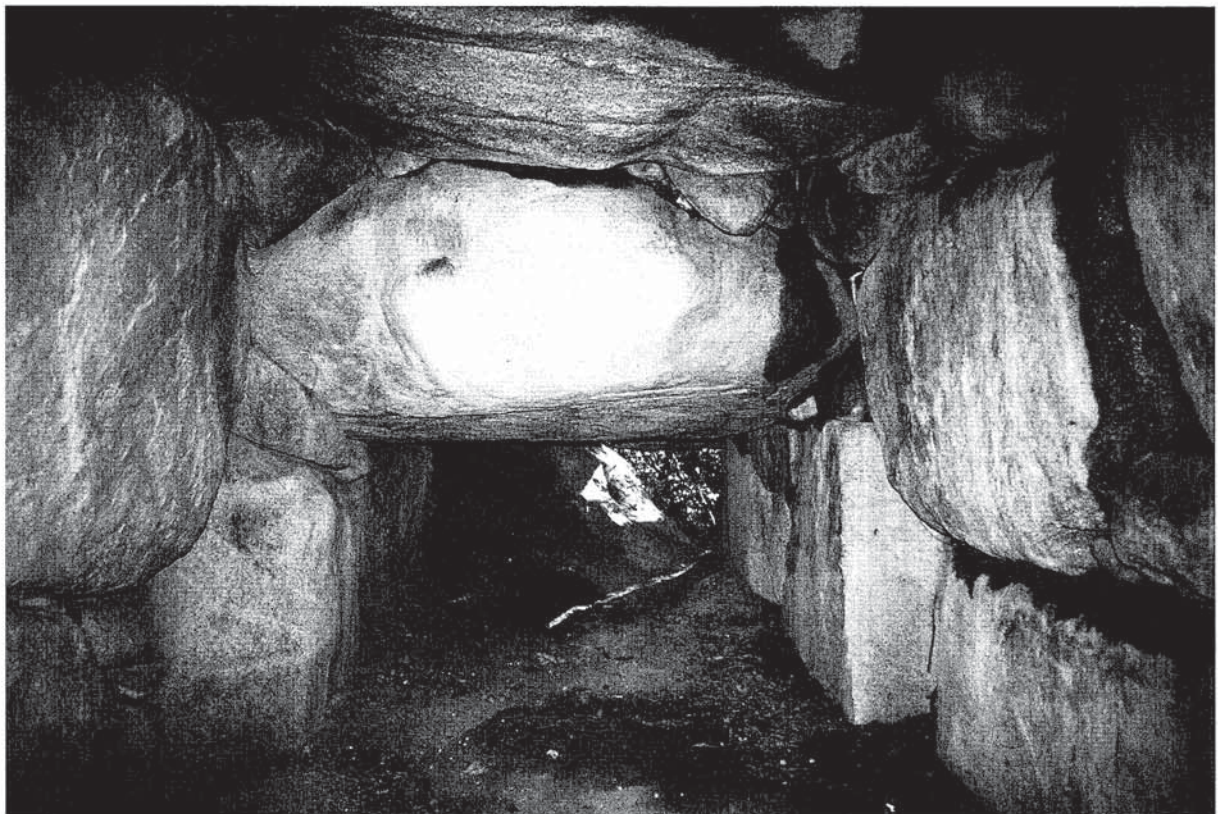
玄室左袖



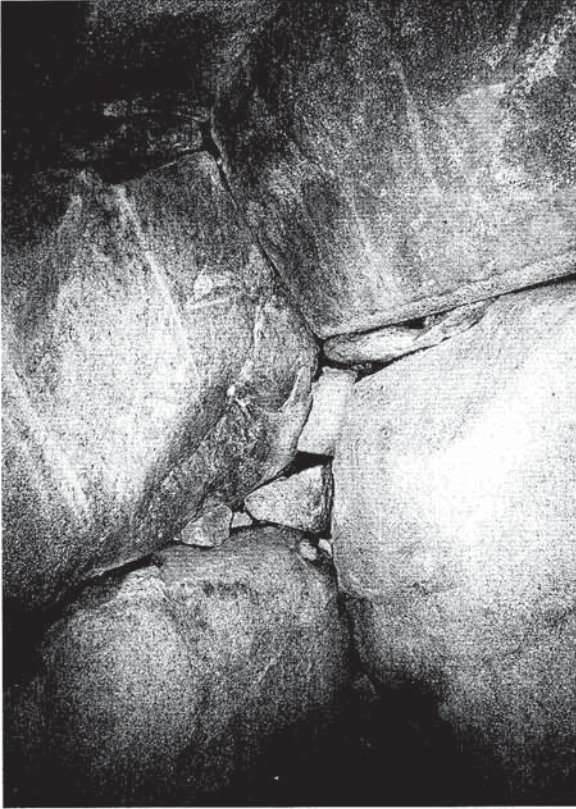
玄室右袖



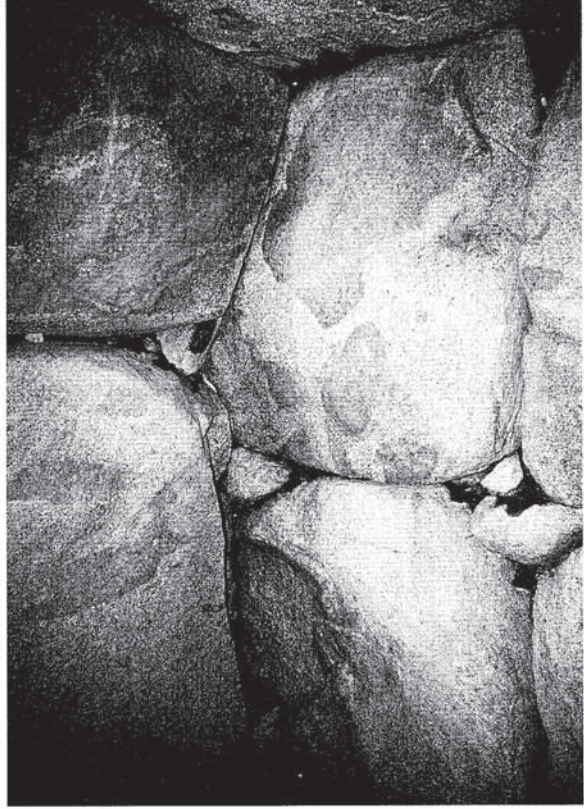
奥壁



玄門



玄室北西隅



玄室北東隅



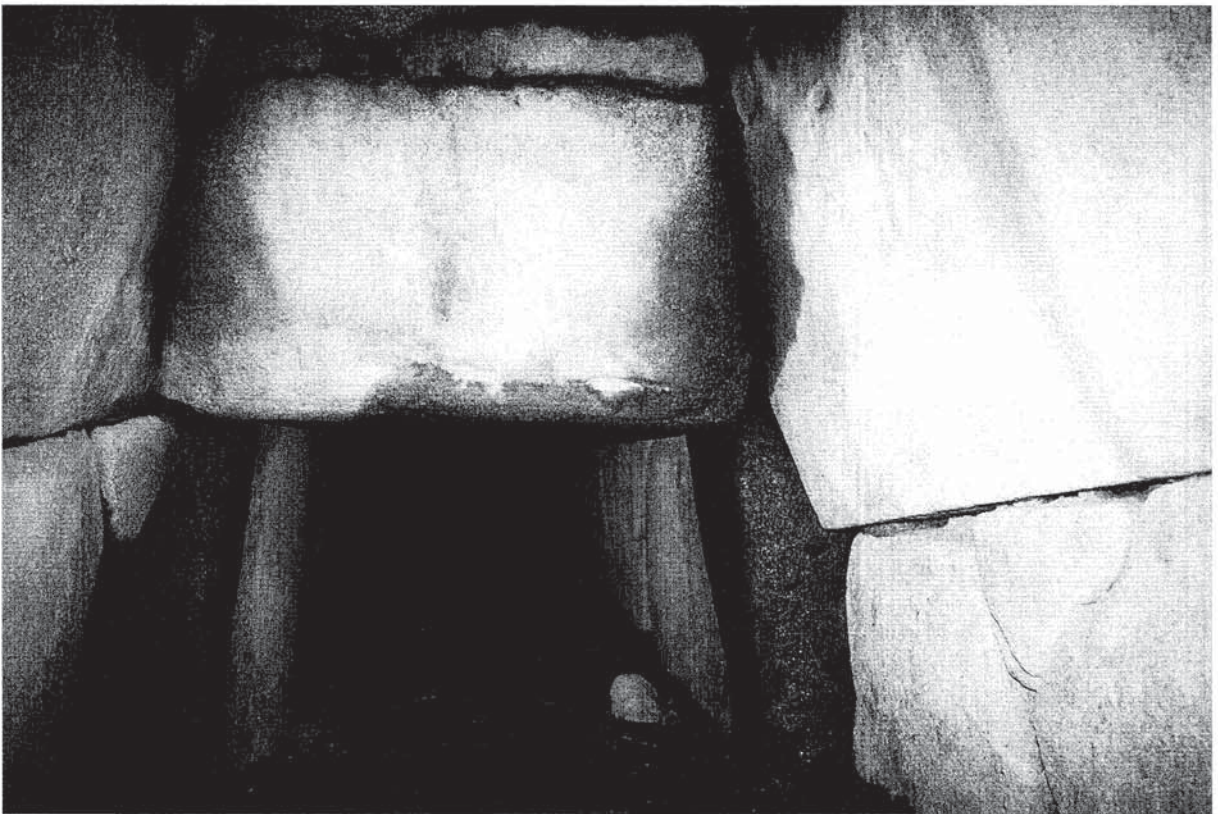
玄室左袖



玄室右袖



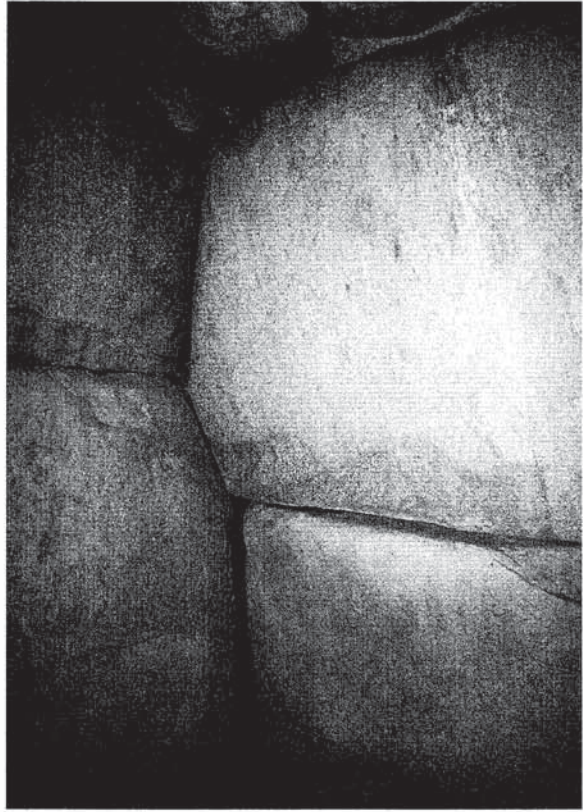
奥壁



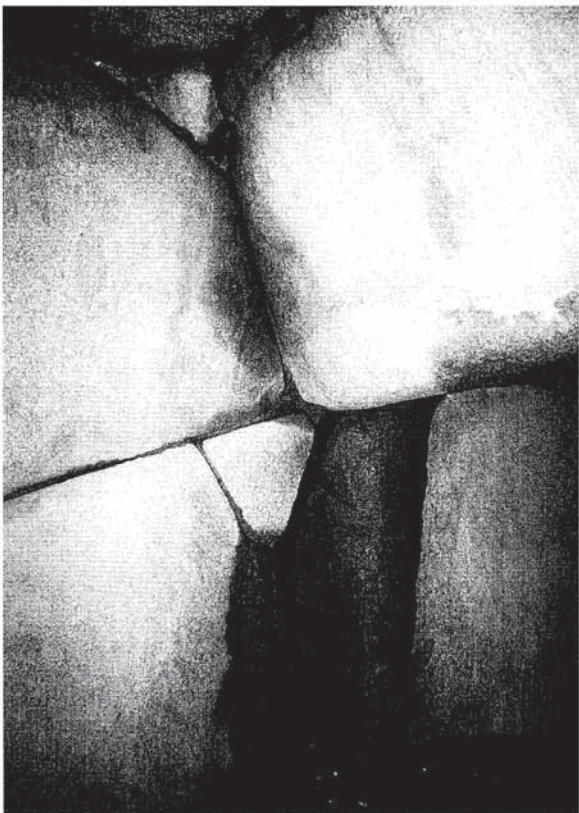
玄門



玄室北西隅



玄室北東隅



玄室左袖



玄室右袖

図版七 エンドウ山一号墳(一)



奥壁



玄門



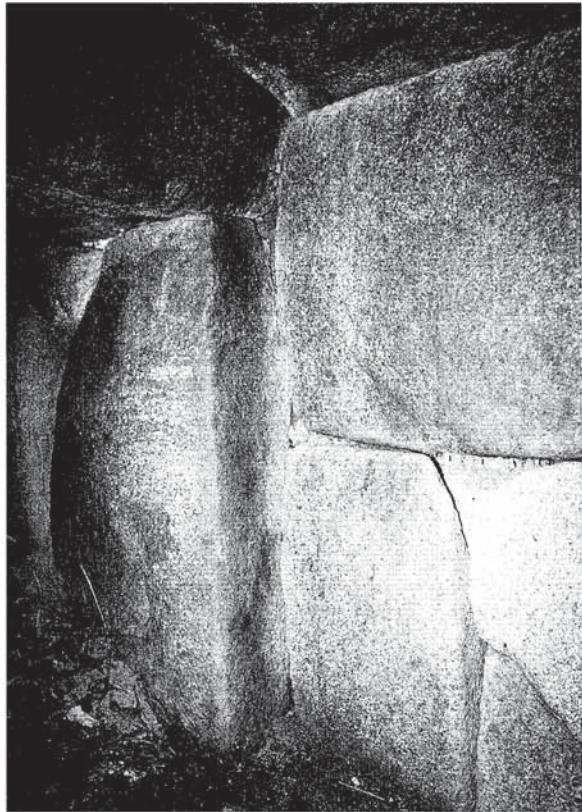
玄室北西隅



玄室北東隅



玄室左袖



玄室右袖

報告書抄録

ふりがな	おうりょうのちいきしけんきゅう						
書名	王陵の地域史研究						
副書名	飛鳥地域の終末期古墳測量調査報告Ⅱ						
巻次							
シリーズ名							
シリーズ番号							
著者名	西光慎治、山本謙悟、奥田 尚						
編集者	西光慎治						
編集機関	明日香村教育委員会事務局文化財課						
所在地	〒634-0103 奈良県高市郡明日香村大字飛鳥112番地 TEL0744-54-5600 FAX0744-54-5602						
発行年月日	西暦2007(平成19)年3月31日						
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査原因
		市町村	遺跡番号				
石舞台古墳	奈良県高市郡明日香村大字鳥庄小字塚脇135	29402-1	17-B-12	34°28'0"	135°49'33"	2006.8	学術
打上古墳	奈良県高市郡明日香村大字細川小字打アゲ724	29402-1	17-B-17	34°28'0"	135°50'04"	2002.7	学術
ムネサカ1号墳	奈良県桜井市粟原字峯坂417	29206-1	15-A-171	34°30'12"	135°53'16"	2002.6～2004.12	学術
エンドウ山1号墳	奈良県桜井市倉橋字吉ヶ谷790	29206-1	14-D-145	34°29'50"	135°51'53"	2001.1	学術
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項	
石舞台古墳	古墳	飛鳥時代	横穴式石室	-		一辺約60mの方墳。	
打上古墳	古墳	飛鳥時代	横穴式石室	-		石室材の一部に切石を使用。	
ムネサカ1号墳	古墳	飛鳥時代	横穴式石室	凝灰岩片		岩屋山式の横穴式石室。	
エンドウ山1号墳	古墳	飛鳥時代	横穴式石室	-		切石を使用した精美な横穴式石室。	